

聖徒の道

1974年3月20日発行（毎月1回20日発行） 第18巻3号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可



聖徒の道

3 1974

私はペテロとヨハネが宮もうでに行く途中、美しの門にさしかかったぐだりを幾度となく読んだ。そこには生まれてこのかた自分の足で歩いたことがないという足なえがいて、門を通る人々に施しを求めていた。ペテロとヨハネが通りかかると、彼は施しを求めて手を伸ばした。ペテロは、宣教師であり教会幹部である自分たちふたりを代表して次のように言った。「わたしたちを見なさい。」当然この足なえは何かもらえるものと期待したに違いない。しかしペテロの言葉はこうだった。

「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレイエス・キリストの名によって歩きなさい。」(使徒3：4-6)

私の心の目には、この足なえの心の動きがありありと見える。「この人は私が生まれつき足がきかないのを知らないのではないだろうか。この私に歩けと言うなんて。」しかし聖書の記録はそこで終わってはいない。命じただけでは不満足だったペテロは、「彼の右手を取って、起して」やったのである。(使徒3：7)

それからの光景を想像していただけるだろうか。この高貴な、使徒の頭であるペテロは、足なえの肩に手をまわし、次のように言ったに違いない。

「さあ、勇気を出すんだ。一緒に歩こう。神が私たちしもべに賜わる権能と権威によって祝福を受けたのだから、あなたは必ず歩ける。」そしてこの男は踊りあがって喜んだのである。



人よりも高い所に立たなければ、人を引き上げることはできない。自分が燃えていなければ、人の心に火をともしことはできない。人を救うには、その人に望むことをまず自分が行なわなければならないのである。教師の皆さん、人を教え導くときのあなたがたの

証、みたまは、求める者に力を与えるまたとない宝となる。その点あなたがたは与えるものを多く持っている。今までどのような状況にあっても、力づけてもらいたいと思わなかった人はいらるだろうか。いや、いないはずである。

心の糧

大管長 ハロルド・B・リー

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグラン・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・バック
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアーズ
(内務伝達部長)
ジョン・E・カー
(配送翻訳部長)
ドイル・L・グリーン (教会誌編集主幹)
ダニエル・H・ラドロウ
(教会教課企画調整主任)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木 沼 修 一

ローカル編集

高 木 まりゑ

聖徒の道 3月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

も く じ

心の糧	ハロルド・B・リー	
大管長会メッセージ／喜びと幸福	マリオン・G・ロムニー	98
新約聖書の起り	C・ケント・ダンフォード	100
福祉こそ教会である：		
ジュニア・ライト・チャイルド兄弟の談話		104
質疑応答		108
＜聖典の探求＞礼拝と音楽	ロバート・J・マッシューズ	110
涙に曇る目は見ることができない	エレイン・キャノン	112
ドン・タイのねがい	フェイス・イングリシ・ヌープ	117
過越の祭		120
新しいおうちをさがして	ペギー・ゲイツェル	122
おもちゃばこ		124
インターナショナル号の旅	ウィリアム・G・ハートレー	125
聖きみたまに導かれ	ミルトン・R・ハンター	128
聖霊の絶えざる力	フランクリン・D・リチャーズ	130
その場にいるがごとくに	S・デルワース・ヤング	133
信仰の実践	O・レスリー・ストーン	136
汝ら聖なる所に立つべし	ハロルド・B・リー	139
ローカル・ニュース		142

大管長会メッセージ

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

喜びと幸福

リーハイは、息子のヤコブに、人がどのようにして死すべき状態になったかについて、さらに永遠進歩の計画について説明した後、次のように言った。

「……万物は万物を知る者の全智に由って成った。

アダムが墮落したのは人類を生ずるためであり、人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(Ⅱ ニーフエイ 2：24, 25)

ここで言う幸福は、次のように辞書で定義されている。

1. 良いものの獲得あるいは期待によって湧き起こる感情。喜び。歓喜。2. 幸せな状態。至福。3. 幸せの原因となるもの。また、「物事の好ましい状態」とも定義されている。

予言者ジョセフ・スミスは、幸福を次のように定義している。「私たちの存在の目的である。そして、私たちがそこに通じる道に従っていけば到達できる、存在の究極目標である。この道は、美德の道、公正の道、忠実の道、神聖の道であり、神のあらゆる戒めを守る道である。」(*Teachings of the Prophet Joseph Smith* 「予言者ジョセフ・スミスの教え」[英文] P. 255, 256)

幸福は必ずしも経済的成功を伴うものではないということが、救い主の次の言葉にあらわれている。「……たとくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである。」(ルカ12：15)

無論、生き続けるためには、物質的に必要なものを確保しなければならない。生命の維持のために、この世の物も充分なければならない。主御自身も、私たちが物質的な面で平等にならなければ、霊的な面で平等になることはできないと言われた。完全に主の計画に従って生活できるようになったときには、私たちは物質的な面で平等になるはずである。しかし、これが幸福のすべてではない。

人は、外部から与えられたものではなく、真の意味で幸福になることはできない。聖典には、救い主がこの地上におられたときに行なわれた肉体的癒しの例が数多く記録されている。確かにこういう癒しは、肉体的苦痛や病いから救いはしたが

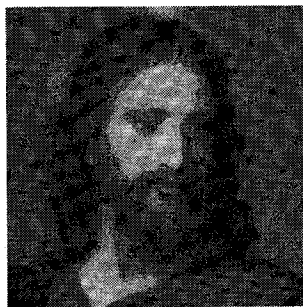
必ずしも、本当の喜びと幸福をもたらしたわけではない。

本当の喜びや幸福は、霊的に癒されることによって得られるものである。それは内部から生まれ来るものである。モルモン経の、モーサヤ書第4章の最初の4節を読んでみるとよい。ここには、ベンジャミン王の説教に聞き入っていた群衆が、みたまの力によって、自分たちの犯した罪の大きさを認識したことが書かれている。自分たちの罪についてひどく心配した群衆は、主に向かって声高く叫んだ。

「ああ憐れなまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして、われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。われらは……神の御子イエス・キリストを信じ奉る。」(モーサヤ4：2)

こうして群衆は、キリストを信じ、悔い改めたために罪の赦しを受けた。そして、罪が赦されたために、彼らの心は喜びで満たされた。また、心の平安を得た。彼らは霊的に癒されたからである。

救い主イエス・キリストは、私たちの霊を癒す力を持っておられる。あらゆる人の霊は、それが罪の重荷を背負っている限り、病んでいる。神のいかなる息子、娘も、神のみたまの力によってその霊が癒されるまでは、決して幸福になることはできないのである。人が赦しを受けると、その霊は癒され、心が安らくなる。それゆえ、自らを完全な者にしようという努力に応じて、その幸福も増し加えられるのである。



「……汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。」(教義と聖約59：23)

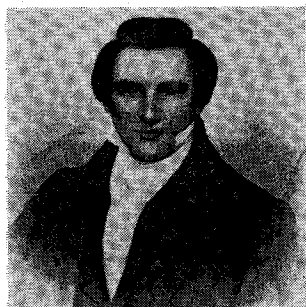
そのためには、モロナイ書第7章でモルモンが述べている愛の特質、すなわち親切、忍耐、謙遜、仁愛を生活の中に取り入れることである。こうして、最終的には、モルモンがキリストの純粋な愛と言った、その愛を心の中で育むことができるのである。これこそ、真の幸福へ至る道、人が私たちの天父のような者になるための道である。

リーハイの言葉によれば、人は喜びと幸福を得るために創造されたが、その喜びや幸福は、この生涯においてのみ経験するものではない。もし人が約束されている条件に合致した

生活をするならば、現在この世で喜びと幸福とを得ることができし、肉体を離れた霊として復活を待っている間も、またその後も永遠にわたって、喜びと幸福とを得ることができるのである。

主は予言者ジョセフ・スミスを通じて、次のように言われた。「……汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世に在りては平和を得、次の世に在りては永遠の生命を得ん。」(教義と聖約59:23)

聖典には、肉体を離れた霊の幸、不幸の状態が、明確に記されている。予言者ジョセフが「教会の律法を包含する」啓示と述べているものの中で、主は次のように言われた。



幸福は「私たちがそこに通じる道に従って行けば到達できる存在の究極目標である。この道は、美德の道、公正の道、忠実の道、神聖の道であり、神のあらゆる戒めを守る道である。」

「汝相愛して共にこの世に生きよ。されば死にたる者を失いたるために涙を流し、ことに栄光ある復活の望みを有たざる者のためにいよいよ歎き悲しめ。

およそ、われにありて死ぬる者は死を味わうことなし。それは死は彼らにとりて甘ければなり。

また、われにあらずして死ぬる者は禍なるかな。そは、死は彼らにとりて苦ければなり。」(教義と聖約42:45-47)

また、アルマは息子のコリアントンに次のように教えた。

「さて死んでからよみがえる時までの霊の有様はどうであるかと言うに、ごらん、あらゆる人の霊はそれが善であっても悪であっても、この死ななくてはならぬ肉体を離れるとその霊に生命を与えたもうた神が備えたもうところへ帰るのである。これは天使が私にお示しになった。

その時義しい人の霊はパラダイスととなえる幸福な有様、すなわち安息と平和な有様に入り一切のわずらいと憂いと悲しみとを離れて息む。

次に、悪人の霊は……そとの暗やみの有様に追い出され、泣き悲しんで歯がみをするのである。これはかれらが自分で罪悪を犯し……た結果である。」(アルマ40:11-13)

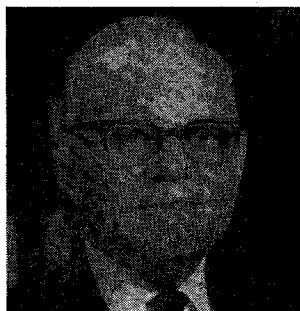
ヤコブは、ニー・ファイ第二書第9章に書かれている偉大な説教の中で、次のように言った。

「……すべての人々が……復活するとかれらはすでに不死不滅となっているから、イスラエルの聖者の審判の座に出なければならぬ。」こうして裁かれたあと、「イスラエルの聖者を信じ、この世の苦難を堪え忍び、世の辱しめを物ともしないイスラエルの聖者の聖徒である義人たちは、この世の始めからかれらのために用意された神の王国を受け嗣いで、その喜びはとこしえに充ち満ちる。」(Ⅱニーファイ 9:15, 18)

リーハイの次の言葉は、真に的を射ている。「……人類が現世に在るのは幸福を得んためである。」(Ⅱニーファイ 2:25) 主がモーセに次のように言われたことから、私たちは主の望みが私たちの幸福にあることを知っている。「……これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ 1:39) また、アルマが息子のコリアントンに言った次の言葉が真実であることを知っている。「……罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ 41:10) これらの言葉は、正に私たちが必要としているものである。

「……人はみな現世に於て自由であり、およそ人間のためになるものは何でも与えられる。そして万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか、または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから、その束縛と力に由って定まる束縛と死とを選ぶか、これは全く人間の自由である。」(Ⅱニーファイ 2:27)

「それであるから、あなたたちは喜び勇め。そして、あなたたちは自分の思う通りに行う自由があるから、限らない死の道〔不幸〕を選ぶかまたは永遠の生命の道〔喜びと幸福〕を選ぶかは、各自の自由であることをおぼえておけ。」(Ⅱニーファイ 10:23)





新約聖書の起り

C・ケント・ダンフォード

紀元64年、ローマは壮大な都市であった。そこは、イングランドからユーフラテスにまで及ぶ、史上最強の帝国の中心地であった。イエスが誕生された当時統治の座についていた最初の皇帝アウグストは、レンガ造りの都市ローマを大理石の都市にしたことを誇っていた。またその後の皇帝たちも、互いに競い合って巨大な建造物を建て、永遠の都を飾った。それらの建造物は今なお旅行者の心に驚異と喜びを与えている。

紀元64年に大火があり、都の貧民くつを焼き払った。その様は地獄さながらであった。そのとき王座についていたのは、半狂人の皇帝ネロであった。彼は自ら芸術家であるとうぬぼれ、また都ローマを美しくするという大計画を達成して自分の名を永久の記念碑として残すため、人民を長い間苦しめた。またそのようにして財をなすことに何の恥らいも感じない男であった。皇帝が放火犯人だといううわさが立ったとき、彼は巧みにその責めを他に転化し

ようとした。そして、この大都市の新しい宗教の間ですでに不興をかっていたクリスチャンと呼ばれる集団を、その犠牲とした。ネロは直ちに彼らを逮捕させ、その上丁重にも、残酷な拷問の場として自分の競技場を使うよう申し出たのであった。ローマの歴史家タキトゥスは、次のように記録している。

「……ある者は野獣の皮で全身をおおわれ、犬に噛み裂かれた。また別の者たちは、十字架にかけられて火あぶりにされ、日没後の夜空を焦がした。……彼らの罪は、最高の厳罰を受けるに値するものであったけれども、人々の同情心をかき立てた。それは彼らが公民のためではなく、一個人の怒りの気持ちを満たすために殺されたからである。」¹

この恐怖の日々が過ぎて間もなく、マルコは、殉教した教会の指導者の話を保存したいと思い、現在マルコによる福音書として知られている書を誌すことにした。マルコが第一に意図したのは、ペテロやその他の人々からしばしば聞いていた、キリストの偉大な御業を書き残すことであった。その10年から15年ほど後に、マタイ、次いでルカが、それぞれ福音書を書いたと思える。ふたりは彼らの記録の中に、マルコが誌していたほとんどすべての事柄のほかに、イエスの生涯と教えを明らかにするに役立つ特別に重要な事柄を加えた。ヨハネによる福音書はさらに後年（紀元90年から100年の間）に誌され、新約聖書の中では最も後期のものとされている。

ではなぜ彼らはそれほど長く待たなければならなかったのだろうか。それには次の幾つかの理由が考えられる。(1)伝道の業に奮励するあまり、著作活動まで手が回らなかった、(2)実際にイエスを知っていた人々から話を聞き、

適格な記録を残すため、(3)キリストの再降臨が近く²、また明らかにそのときには記録は全く必要ないと信じていたため。

そのように福音書が書かれたのは後年であるために、その真実性を勘繰る人もいる。しかし福音書の著者たちは彼らの記録した言葉や出来事を記憶にだけ頼ったのであろうか。またこのときまでにイエスの話が曲解され、飾り立てられることがあり得たであろうか。聖書学者は、福音書の著者たちが信頼できる口伝の資料のほかに、それ以前の記録からも多くの情報を得ていたと信じているが、このことを知れば先に挙げた問題もなくなるであろう。ルカはその書き出しの部分に、彼以前にも「多くの人」がキリストについて書いていると語り、この点を証拠立てている（ルカ1：1—4参照）。また、2世紀初頭に小アジアのヒエラポリスで監督をしていたパピアスは、次のような興味ある言葉を残している。「マタイはヘブライ語でイエスの言葉を記録した。そして人は皆精一杯これらの言葉を解釈した。」³ 人々はこの記録から、マタイは十二使徒の内の記録者で後年他の人々に用いられた日誌を書いていたと考えるようになった。パピアスは、学者たちが「Q」の文字で表わしている、福音書前のある文書についても述べている。この「Q」は、資料を意味するドイツ語「Quelle」を表象している。また学者たちは、マタイとルカが誌したイエスの教えの多くに共通点があることを見出した。これは、両福音書の資料として「Q」が使われていることを示している。言うまでもなくモルモンの学徒にとっては、聖書の真実性を堅く支持する上で、この証拠は二次的なものである。と言うのはキリストを証する第二の書、モルモン

経があるからである⁴。

福音書は当時作成されたものではあるが、新約聖書中の最も早い時期に誌された書ではない。キリストが死んで復活された後、使徒たちは、驚くほど精力的に、地中海地方に福音を宣べ伝え始めた。ルカはこのすばらしい業を簡潔な歴史として書き留めている。それが使徒行伝と言われるものである。福音書は、キリストが十字架にかけられたときに使徒たちの抱いた落胆の気持が、復活なさったメシヤを目にし、その傷口に触れたことによって、いかに早く拭い去られたかを告げている。熱意に燃え、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」（マルコ16：15）と救い主から命じられた神聖な務めを負って、使徒たちは熱心にこの「良きおとずれ」を宣べ伝えた。使徒たちはあらゆる方向に散り、宣べ伝えたと言われている。トマスはインドのはるか東方まで行ったと思われる。ピリピはエジプトで働き、パウロは小アジアとギリシャに行き、ペテロはパレスチナと西方で教えを説いた。彼らの伝道に匹敵するものは全くない。ペテロの大胆な言葉は、彼らの姿勢を特徴づけている。「神に聞き従うよりも、あなたがたに聞き従う方が、神の前に正しいかどうか、判断してもらいたい。わたしたちとしては、自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない。」（使徒4：19, 20）使徒行伝には、最も勇敢なクリスチャンのひとりであった、使徒パウロの伝道の業が主に誌されている。パウロはその伝道の業を果たしている間に、地方の教会内に起こった諸問題を扱った非常に多くの手紙を書いている。これらの書簡は、新約聖書中の各書の中でも早い時期に書かれたもので、紀元50年から64年の間に誌されて

いる。パウロは、キリスト教に奇跡的な改宗を遂げる前は、ユダヤのラビの教えを学んでいた。そのため、彼の手紙の多くは力強いもので、同時代の他の人の手紙とは異なっていた。従って彼の書簡は非常に表現が巧みで、非常に有益な教えを含んでいる。

ヘブル人への手紙や7つの一般的な書簡、および黙示録など、その他の書はほとんど、1世紀の後半期に、教会内外の諸問題に直面して書かれたものである。ヘブル人への手紙およびペテロの第一の手紙、黙示録は、ローマ政府に対抗するためのクリスチャンとしての答えを与えている。ドミティアヌスの統治中（81—96年）に、多くの地方で皇帝礼拝が義務づけられた。多くの信心深いクリスチャンは、神への忠誠を固持したので、国家からの迫害の危機にさらされた。愛弟子ヨハネが、ローマ政府と宗教を、黙示録によって陰ながら攻撃を加えたのは、この暗黒時代のクリスチャンを励ますためであった。ヨハネは、多年にわたる善悪の



抗争をきわめて比喩的に描写し、神の王国の最終的な勝利で結んでいる。

ヘブル人への手紙が書かれたのは、ローマに住むユダヤ人のクリスチャンに、ユダヤ教に立ち戻ることによって安易な道をとることのないように自覚させることであった。著者は、ユダヤ教よりキリスト教が、また旧約時代の予言者や祭司よりもキリストが優れていることを示すために書いている。

教会の直面したもうひとつの問題は異教の教義と分派であり、その中で最も危険なものはグノーシス主義であった。パウロの幾つかの手紙は、当時のこの異教の出現を攻撃している。グノーシスの活動は、2世紀の教会にとってきわめて危険なものとなった。ヨハネの3つの手紙とユダの手紙、ペテロの第二の手紙は、本来はこの危険な異教を攻撃し、教会の教えを守ることを意図して書かれたものである。

新約聖書中の最後の書が書かれた2世紀初頭には、まだ新約聖書は存在しなかった。では、これら別々の書はどのようにして集められ、聖典とみなされるようになったのであろうか。

当時のクリスチャンはユダヤ人が多く、彼ら自身すでにユダヤの教えから離れてはいたが、聖典として最初に受け入れたのは旧約聖書であった。イエスは、ユダヤの信仰に伴う幾つかの慣習を拒み、自分はモーセの律法を成就し、改めるために来たのであると宣言された。それ故、イエスの教えは、旧約聖書の記述よりも大きな権威があるとみなされている。パウロもまた、モーセの律法に勝る教義上の見解と啓示を心に抱いていた。律法は単に「わたしたちをキリストに連れて行く養育掛」（ガラテヤ3：24）であると、パウロは語っている。そのようにはじめから、イエスと使徒たちの教えには、

旧約聖書中の教えに等しいか、あるいはそれに勝る権威があったと考えられている。

使徒行伝は、使徒がみたまの勧めを受ける人であり、承認された神の代弁者であることを告げている。それ故彼らの言葉と手紙が、教会においてどのようにみなされていたと結論づけることは自明の理である。パウロは、彼の説いた教えが人の知恵ではなく、主の靈感であることをはっきり述べている（Ⅰコリント2章）。パウロはガラテヤの聖徒にあてて、彼の説いた福音は「人間によるものではなく」、「イエス・キリストの啓示によった」ものであると書き送った（ガラテヤ1：11-12）。またパウロは、彼の書いた事柄は「主の命令」とまさに同じであると力強く宣言している（Ⅰコリント14：37）。テサロニケの聖徒にあてた第二の手紙で、パウロは「言葉や手紙で教えられた」教えを堅く守るように勧めている（Ⅱテサロニケ2：15）。さらに、ⅠテモテとⅡペテロの著者は、それ以前に誌された新約聖書中の書を聖書と言っている（Ⅰテモテ5：18、Ⅱペテロ3：15、16）。このことから、使徒たちは、彼らの書き物を権威があり、聖典に等しいものであると考えていたと言える。これらの記録を受け取った教会員が、これらを靈感を受けて誌された使徒の言葉として重んじたことは、まぎれもない事実である。パウロの手紙は、旧約聖書の章句と共に、教会の集会で読まれた（コロサイ4：16、Ⅰテサロニケ5：27）。今日私たちが教会幹部のすばらしい説教を写し取るように、時を経るにつれ、これら当時のクリスチャンの書き物も写し取られ、また書き取られた。

ではなぜ、どのような力がこれらの書き物を聖典としてひとつに集めるよ

うに人々をかりたてたのであろうか。主な点として次のものが挙げられる。

(1)教会は2世紀に入り、イエスを個人的に知っていた人々が、ほとんどすべて死んでしまった。そのために、救い主に関する貴重な回顧の記録を保存しておきたいという気持が高まった。(2)キリストの再降臨が切迫していることを信じる気持が薄らぎ、教義的にも組織的にも教会を安定させる必要性が増してきた。(3)イエスと使徒についてのにせの文書が出回っていたため、疑わしい記録と確実に切り離す必要が生じた。(4)背教的な教義が教会を混乱させており、多くの人々が信仰を危くしていた。これらの背教者や非難者に答える良い方法として、承諾し得る真理が含まれており、権威のある教義の書を指摘すること以上のものがあるだろうか。

全く奇妙なことであるが、新約聖書を編纂する活動を刺激したのは、2世紀のある最も名高い背教者であった。その名をマルシオンと言い、小アジアのポント出身の富裕な船主であった。マルシオンは、ユダヤ教およびユダヤ人の威勢から教会を完全に切り離してしまいたいと考えた。そして彼は、教会では旧約聖書を受け入れず、それに代わる独自の経典を持つようと発案した。そのために、ルカによる福音書とパウロの10通の手紙を経典にするよう提案した。ところが後にマルシオンは破門され、強力な背教者の一党に入ってしまった。しかしながら、それでもなお彼は、クリスチャンの聖典に関心を払い続けた。それから間もなく、その他の著名なクリスチャンたちが、好ましい一連の書き物を推薦するに至った。その後200年間、キリスト教会の指導者たちは、教会所有の文書類を念入りに取捨し、最後にわずか27の短

い冊子と手紙を選んで、新約聖書とした。

経典に四福音書と大部分のパウロの手紙とを入れることについては、初めからほとんど異論がなかった。しかし著者が不明の、あるいは価値の疑わしい、後年のクリスチアンの書き物を入れるかどうかについては、多くの議論がたたかわされた。次第に数の増してくる著者のわからない福音書、行伝、手紙は、問題を一層複雑にした。なぜなら、それら多くも使徒の著わしたものであると主張されていたからである。M・R・ジェームズの「新約時代の著者不明の書」(*The Apocryphal New Testament*)には、これらの文書類からの600ページに及ぶ選集が挙げられている。これらの書のほとんどは、経典のまじめな内容からは明らかにほど遠い、奇抜で異端の話を含んでいる。これら聖書外典の福音書の多くは、イエスの生涯の知られていない期間に関する興味ある話を取り上げ、またギャップを埋めるために多くの物語を扱っている。例えば、グノーシスの経典であるトマスによる福音書には、イエスがその少年時代に、粘土で動物を造り、それからそれらの動物を生かして友だちを驚かせた話が出ている⁵。また同じ書の中に、ヨセフがあやまって板を短く切りすぎたが、幼いイエスがそれを手に取り、望みの長さに引きのばす、奇跡を現わしたことも出ている⁶。マリヤが肉体を持ったまま昇天した話も幾つかあり、カトリック教会はその伝説をあり得る真理として後に受け入れた⁷。また使徒たちに関する同様のあり得べからざる話もある。これら多くの話は中世には広く知られており、また現在もこのような作り話は廃れていないのである。

一方これらの書と異なり、新約聖書

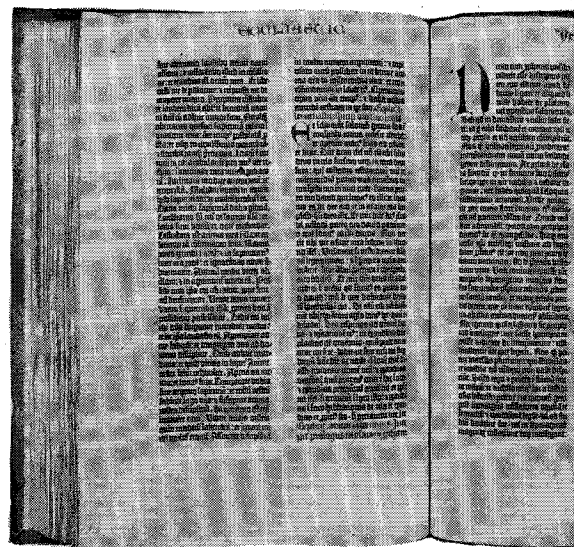
の中に加えてもよいほど、非常に貴ばれていた書も幾つかある。これらの中で最も重要なものは、2世紀初頭に書かれたもので、クレメンスの手紙、バルナバの手紙、ヘルマスの牧者、十二使徒の教訓(通称ディダケー)、ペテロの黙示録などが挙げられる。

紀元200年までには、どの書を新約聖書の中に入れるべきかということについて、ほとんど意見の一致をみている。このことは、紀元180年頃の書を写し取った写本がよく立証している。この写本は、18世紀にそれを発見したイタリアの古典学者にちなんで、ムラトリ断片と呼ばれており、ローマ教会の新約聖書目録が誌されている。そしてそこには、四福音書と使徒行伝、パウロの13の手紙、ユダの手紙、ヨハネの2つの手紙、黙示録が挙げられている。またペテロの黙示録も条件付で承認され、ヘルマスの牧者も読む価値のある書として紹介されている。しかしヘブル、ペテロ第二、ヤコブおよびヨハネの各手紙と黙示録は、その後100年間ほど教会間で議論を呼んだ。例えば、コンスタンチヌス大帝時代のキリスト教歴史家エウセビオスが、325年に著わした著書に、受け入れの状態に応じて各書を次の4つの範ちゅうに分けていることは、驚くべきことである:(1)認められる書、(2)論議を呼んでいる書、(3)偽造の書、(4)不敬で、考慮に値しない書⁸。

このわずかに残された問題もやがて解決し、聖典の規範も定まった。聖ヒエロニムスのラテン語訳聖書ウルガタは、この問題を解決するのに大きな力を示した。このヒエロニムスの新約聖書には、現在私たちの使用している27の書が含まれていた。キリスト教徒たちが、経典としての書を限定し、それ以外は聖典も啓示も存在しないと考

えていることは、末日聖徒にとっては喜ばしくないことである。

この話から明らかなひとつの重要な点は、経典の注意深い取捨選択に見られる、新約聖書の信頼性に関する概念である。教義の正しさ、一般の扱い、著者の信頼性に関するテストを通過しなかった書は、聖典として認められなかった。この事実は、この無類の記録に対する私たちの信頼を強いものになっている。



注

- 1, Tacitus, *Annales* 「年代記」 15: 44. Ray C. Petry, *A History of Christianity* 「キリスト教史」 P. 42より引用。
- 2, イエスは使徒たちに再降臨の時を明らかにしておられない。使徒1: 6, 7参照。
- 3, Eusebius, *The History of the Church from Christ to Constantine* 「キリストからコンスタンチヌス帝に至るまでの教会史」 G. A. Williamson英訳, P. 152
- 4, I コリファイ13: 40, モルモン7: 8, 9参照。
- 5, Montague Rhodes James, *The Apocryphal New Testament* 「新約時代の著者不明の書」 P. 49
- 6, 同, P. 57
- 7, 同, P. 194 ff
- 8, Eusebius, 前掲書, P. 134—35

福祉こそ 教会である

ジュニア・ライト・チャイルド 兄弟の談話

1936年、主は教会福祉プログラムの構想を啓示され、大管長会はパイオニアステーク部の若きステーク部長ハロルド・B・リーを、このプログラム組織化のために召した。以来数十年の内にプログラムは全教会的に発展し、こうして貧困者の援助と、富めるときのみならず欠乏のときにも教会員が自立するよう援助することの重要性は、何年も前から明示されてきたのである。

1972年、ジュニア・ライト・チャイルド兄弟が、現在福祉活動として知られるこのプログラムの実務部長に召された。彼は管理監督会の指揮下で、教会員の物的安寧と霊的成長を助けるための広範な責任を受け持っている。

「エンサイン」編集局員との会見の席上、チャイルド兄弟は、最近発表された新しい目標と共に、開始以来このプログラムの骨子となっている福祉活動の原則について、次のように語った。



ジュニア・ライト・チャイルド

教会福祉活動実務部長

エンサイン：福音の中で、福祉プログラムの果たす役割は何でしょうか。

チャイルド兄弟：福祉活動は困窮者救援対策だけでなく、福音の原則、それも基礎となるひとつの原則でもあるのです。マリオン・G・ロムニー副管長は、「福祉は教会のプログラムではない。それは教会そのものである」と言いました。福祉は、福音の教えや原則の実践なのです。私たちの地上での目的は、天父の御前に帰ることができるように完全になることです。

学ばなくてはならない霊的な真理や、身につけなくてはならない行ないの多くが、福祉活動というものに密接に結びついています。たとえば一番大切な第一の戒めは主を愛すること、二番目の戒めは、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ22：39）です。私たちは愛をどのようにして示すのでしょうか。「汝らもしわれを愛すれば、われに仕え……るべきなり」（教義と聖約42：29）これが奉仕の原則です。ベンジャミン王はこのことを強調して、次のように言いました。「……お前たちが同胞のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである……。」（モーサヤ2：17）

エンサイン：このような成長、奉仕の概念と、他の社会福祉プログラムとの関係はどのようなものですか。

チャイルド兄弟：私たちは、いかに善意であろうとも、自分でできることをしてあげてはならないと考えています。私たちは成長しなくてはなりません。自分でできること、自分ですべきことを他人にしてもらっていては、私たちは成長しません。

国の政府その他も、自己を扶養できない人たちを喜んで助けるでしょう。けれども、人のために心からの真の犠牲を払うことは、福音にあって成長する上で永遠に存続する原則であり、日の栄の原則なのです。約束された祝福を受けたいなら、このことをなおざりにはできません。

エンサイン：その奉仕と犠牲の原則はどこまで及ぶのですか。

チャイルド兄弟：私たちは自分と自分の家族全員に責任を負

っていることを認識しなくてはなりません。パウロはこう言っています。「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるのであって、不信者以上にわるい。」(1テモテ5:8) また教義と聖約には、妻は夫に、子供は父親に扶養を要求する権利があると書いてあります。(教義と聖約83参照) スティーブン・L・リチャーズ長老は、家族の一致についての話の中で、「もし、自分はパンを得られるのに、年老いた父母や近親者が社会福祉に頼っていると知ったならば、食物も満足にのどを通らぬことであろう」と言いました。(「大会報告」1944年10月8日)

エンサイン：教会の兄弟姉妹に援助を受けるのをためらって、むしろ政府機関に頼ろうとする教会員がいますか。

チャイルド兄弟：そのような態度にはいろいろな理由がありますが、援助を必要とするにふさわしい教会員は、そのように考えるべきではありません。そうする人は他の人が自分のために尽くすことで祝福を受けるのを妨げ、自分で福音の恵みを受けるのを拒んでいることになります。必要に応じて福祉の恩恵にあずかることは、教会の意図するところであり、教会員は何ら恥じる必要がないのです。困っている人は教会のもっとほかの祝福にもあずかります。彼らは主の戒めを守り、断食献金を納めてきて、これまでも、またこれから喜んで福祉計画の中で奉仕したいと思っているのですから、福祉計画から差し出される援助を受けるべきです。

教会員は自分の受ける援助に対して、「能力の及ぶ範囲内で」働くように期待されるので、自尊心を失うことはないということを理解すれば、ためらいは消えます。この労働の原則は福祉の根本です。

エンサイン：断食献金のことが話にのほりましたが、福祉活動の中で断食献金はどのように使われているのか説明して下さいませんか。

チャイルド兄弟：援助は3つの方法で行なわれます。それは奉仕活動と、ステーキ部やワード部の福祉計画に基いて生産された日用品の支給と、必要であれば現金の支給です。この現金が教会員の断食献金から支払われるのです。断食と断食

献金を納めることは主の戒めです。私たちは断食証会に先立って24時間断食をし、それから喜んで断食献金を捧げなくてはなりません。こうして集まった基金はワード部で困っている人のために使われますが、献金だけでそれがまかなえないワード部では、ほかのワード部の剰余金が使われます。断食と断食献金はほとんどの人ができることです。それにこの戒めを守る人には霊的な祝福や力が与えられます。

エンサイン：チャイルド兄弟、教会が承認している政府の福祉計画といったものはあるのでしょうか。

チャイルド兄弟：個人や会社で将来のために基金を貯める計画を促進している国があります。そのような計画は教会も賛成しています。自分の将来の用意をしていることになるのですから。

エンサイン：教会員の何パーセントが、実際に福祉活動の恩恵にあずかっているのでしょうか。

チャイルド兄弟：全員です。ただ、何人が物的な恩恵を受けているのかということになれば、3.8パーセントという答えになります。しかしそれより大事なものは霊的な恩恵で、それは末日聖徒全員に必要です。私たちが完全になるには、与えたり犠牲を捧げたり、救い主の模範に従ったりすることが必要です。私の口からはその大切さを言い尽くせるものではありません。利己心を克服し、隣人に奉仕することで主に愛を示す機会、すべての人に必要なのです。

エンサイン：ワード部の段階では、その奉仕計画はどのようにして立てられるのですか。

チャイルド兄弟：プログラムの原則に則って、ワード部の会員のこの世的な苦勞を軽減してあげることが、ワード部福祉委員会の責任です。この奉仕は非常に大切ですが、福祉委員会や神権定員会の役割でもっと大切なのは、その家族が再び自立し、自分の力でやっていけるようになるように手伝ってあげることです。幾つか例をあげて説明しましょう。

数人の子供がある定員会の会員が、骨の変形する病気にかかって歩けなくなり、手仕事を始めました。監督の指示の下

で福祉プログラムの担当者たちが、彼にどんなことができるのかを判断し、家族や親戚に援助を要請してから、子供たちに必要な物資を与え、保険で払い切れない病院費用の面倒を見ました。それからメルケゼデク神権定員会がその父親を2年間学校に通わせ、彼は立派な簿記の技術を身につけて、定員会の世話で職を見つけました。現在、彼は松葉づえが離れませんし、一生その状態は続くでしょうが、完全に自活しています。彼は父親、夫としての責任を果たしているのです。

また、ある大祭司の家族ですが、10人の子供がいて5部屋きりの家に住んでいました。父親は不治の病で、ほんのしるし程度の収入しかありませんでした。ところが、彼の属する定員会で家屋拡張の計画を立てて、床面積をちょうど2倍にしてくれたので、ひと部屋に3人以上の子供が寝るといことがなくなり、浴室もふたつ増えました。父親は改築が終わる直前に他界しましたが、定員会が改築費用を負担し、労力もすべて提供してくれました。今未亡人と子供たちは、教会員の建てた立派な家に住んでいます。これが定員会本来のあべき姿です。

今あげたことは、定員会の福祉活動としてはおそらく珍しいでしょう。しかしこれほど大きなことでなくとも、同じように大切な福祉活動の例はまだまだたくさんあります。神権定員会は、教会員の家族が適当な準備をして問題を回避できるように手伝い、自立できるように援助する、という責任を持っています。

定員会会長の責任は、会員の中から、困っている会員に役立つ技術や才能を持った人たちを捜し出すことです。それは教育相談、職業相談、技能習得、職業再訓練などといった種類の奉仕です。

援助活動で最も重要なもののひとつは、家計と家庭経済のことです。多分、一番問題が多いのは経済的なことだと思います。その大事な分野で腕をいかに発揮して奉仕できるのは、教師や実業家や会計士などの人たちです。

教会員の必要としているものを全部考えてみれば、利用できる技能や能力が次々と浮かんでくるでしょう。それらの技能、能力は、人に与え、犠牲を払い、ひいては成長と進歩につながる機会をもたらしてくれるのです。

リー大管長は、「与えるには、あなたが今持っているもので充分である」と言われました。まったくその通りです。幸せな夫婦は恵まれない夫婦を助け、実業家や専門家や職人は



災害に見舞われると、昨年合衆国サウスダコタ州ラピッドシティで起きた洪水のように、現地の支部が教会員救援の責任をとる。ソルトレークシティの教会本部からの援助はごくわずかで、ラピッドシティの聖徒たちは独自に救援活動を展開した。



労働の原則が根本であり、それは若いときから学ぶことができる。

自分の才能を他の人たちに分かち与えること。ひとりぼっちの未亡人がいれば、必ずペンキ塗りや力仕事や修理の仕事があるはずです。このように、やろうと思えばどんな人にも分かち与える機会はあるものです。

エンサイン：神権の福祉に重点が置かれていますが、アロン神権についてはいかがでしょうか。

チャイルド兄弟：学校を卒業しているにもかかわらず、まだ自分で家族を養うという責任を引き受けるだけの準備ができていないという若者は、かなり大勢います。そのために、後

々になって福祉援助が必要になるという事態を防ぐ事前の防止措置として、教育相談や職業相談、職業指導が必要になります。目下のところ、アロン神権のほかのすばらしいプログラムと並んで、このプログラムも大きな効果を及ぼしています。準備や教育についての全体的概念が、アロン神権者訓練の成否を決める鍵となります。

エンサイン：チャイルド兄弟、中には、自分は人に与えるような技能を持たないと思っている人がいます。そのような人たちは何を与えることができるでしょうか。

チャイルド兄弟：愛の奉仕を捧げることができます。それができない人はいません。例をあげると、私たちはある調査を行ないましたが、ひとつのステーク部で病院に援助を申し込んだ70歳以上の老人のうち、半数以上は体の健康な人でした。もしだれかが、「あの人に1時間本を読んであげましょう、あるいは1日に1回具合を見に行きましょう、あるいは訪問して庭の手入れをして、新聞を読んであげましょう」と言ってあげさえしたら、お年寄りには病院に行く必要がなかったに違いありません。福祉活動は奉仕できる人と奉仕の必要な人を結びつけるものです。それには扶助協会やヤングアダルトやスペシャルインタレストの全員が含まれ、神権の指導の下で一緒になって働くのです。

エンサイン：教会の福祉プログラムが世間の注目を集めた理由として、災害時の救済対策があげられますが、そのような大規模な救済活動はどのようにして組織されるのですか。

チャイルド兄弟：教会のごく初期の時代から、教会員のこの世間的な必要が満たされるように世話することが、監督の責任でした。困窮者に支給する物資が足りなければ、自分のワード部で余っている物を近隣のワード部の監督たちと交換してそれを手に入れることができました。この考え方から教会全体にわたる生産、配給制度が生まれたのです。

しかし、援助はあくまでも地方単位で行なうことが原則です。「これ、……日の栄の世界の下に在る他の一切の生くる者の上にわが教会員の自立せんがため」（教義と聖約78：14）と言われている通りです。この意味は、まず最初にその家族の中で助け合い、次にワード部、さらにはステーク部、地

区、地域というように援助が要請され、最後の手段として全教会の援助機関が動員されるということです。最後の手段が講じられるのは、教会本部が特別に承認した災害についてだけです。

この原則を示すものとして最近のふたつの例を見てみましょう。合衆国サウスダコタ州ラピッドシティで大洪水が起きたとき、地域の聖徒たちはすぐさま、さかまく洪水の中で犠牲者救済活動を開始しました。衣料や寝具や温かい食べ物や地方の教会組織の世話で提供されました。ソルトレークシティから輸送されたのは、ベビーフード、おしめ、毛布などがトラック1台分だけでした。

もうひとつの例は、去年の12月にニカラグアのマナグアで起きた地震です。ソルトレークシティから現地の聖徒に送られたのは腸チフスの血清だけでした。それ以外の援助はみなその地方だけで行ないました。コスタリカの聖徒たちが救済物資を用意し、政府機関に働きかけて、計画を実行したのです。注目すべきことは、このときマナグアで政府団体以外で、救済活動を許可されたのは、この教会だけだったことです。

エンサイン：チャイルド兄弟、あなたはこれまで1年半の間、教会福祉活動の実務部長の責任を果たして来られましたが、この活動に対する証をお聞かせ下さい。

チャイルド兄弟：いささか理想的すぎるかもしれませんが、福祉活動の責任は、人々をエノクの市の民のようにすることだと思うのです。その市は、住む人が心と精神をひとつにして義しく生活し、貧しい人がひとりもいなかったために、天にとりあげられました。きっと、エノクの市の人たちは霊的にも物質的にもお互いに助け合ったと思うのです。私たちはそのようにならなければ、とても身を変えられたり、聖められたりされないと思います。私たちは喜んで与えること、品物というよりはむしろ自分自身を人に捧げることが、人々に教えなくてはなりません。主は1834年に、ジョセフ・スミスにこうおっしゃっています。

「この故に、もし何人たりともわが造りし多くの物の中より取り、わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に自己の取前をわかつことをせざる時は、悪人と共に地獄に落ちて苦悩を受け目を挙げて望み視ん。」（教義と聖約104：18）

質 疑 応 答

この記事は、教会の教義を宣言するものではなく、読者の理解を増す助けとするためのものである。

「墮落する前に子供をもうけることができなかったにもかかわらず、なぜ主はエデンの園でアダムとイヴに殖えよと命じられたのですか。ニーファイ第一書3章7節に記されている『主が命じたもうたことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に出したまわれない……』という聖句を考えると、特にこの点が疑問に思われます。」



解答／ラドロウ兄弟

この疑問について考える際、最も大切なことは、アダムとイヴはエデンの園にいたとき、果たして子供をもうけることができなかったか否かという点である。聖典には、アダムとイヴは子供をもうけることができなかったとは記されていない。ただ、アダムとイヴは善悪を知らず、罪のない状態に留まっていたとしたら、ふたりは子供をもうけることはなかったであろうと記されている。

例えば、墮落以前のアダムとイヴの状態について述べた次のリーハイの言葉に注目してほしい。「また、アダムとイヴは子供をもうけることもなかったであろうし、それから不幸を知らないから喜びもなく、罪を知らないから善もなさず、そのまま罪がない状態に留ったであろう。」(Ⅱニーファイ2：23) この聖句は、アダムとイヴはエデンの園で子供をもうける肉体的能力を備えていた(それ故、子供をもうけることは可能であった)、しかし、罪のない状態のままである限り、決して子供をもうけることはなかったであろう、ということを示しているように思える。アダムとイヴはエデンの園では罪のない状態であったので、裸であることさえ気づかなかったことを思い起こしてほしい。

次のように自分自身に問うたときに、それが宗教上の疑問を理解する助けとなることがある。「天父はこれをほかにどんな方法で果たされるだろう」と考えると、例えば、天父はアダムとイヴの墮落から生じた避けられない状態を、そのほかにどんな方法で得ることがおできになっただろうか。次に挙げる4つの方法が考えられるが、主のとられた方法のみが受け入れることのできるものである。

1. 主が世を、悪と罪が初めから存在するように創造しておられたらどうであろうか。この場合、神はすべての悪と罪に対して責任を負うことになる。
2. 私たちがいかなる罪も犯すことがないように、神が世

を創造しておられたらどうであろうか。すなわち、神が私たちにいかなる律法をも与えられなかったとしたらどうであろうか。このような状態では、私たちは決して律法を破ること（罪を犯すこと）がないのは事実である。そしていかなる悪も、苦痛も、病いもなかったであろう。しかし、もし罪が存在せず、それに伴う罰も苦悩も存在しなければ、善も、また律法に従順に従うことによる祝福と喜びも得られない。このような世界を望む人はひとりもないであろう。

3. 律法は与えられる（選択の機会はある）が、自由意志（選択の自由）が私たちに与えられないような世を神が創造しておられたとしたらどうであろうか。この状態のもとでは実際の成長があり得るであろうか。しなければならないという理由だけで物事を行なう場合、そこに何の進歩が見られるだろうか。また、私たちに物事を選択する自由が全く与えられていない場合、公平な神は、私たちの行ないの責任をどうして私たちに課することがおできになるだろうか。

4. そのほかの方法として、主のとられた方法がある。主は罪と悪のない世を創造され、アダムとイヴを罪のない状態でエデンの園に置かれた。次いで主は、アダムとイヴに律法（選択の機会）を与えられ、また自由意志（選択の自由）をも与えられた。次に、これは非常に大切な点であるが、主はアダムとイヴが罪のない状態で犯したいいかなる過ちに対しても、ふたりにその責任を負わせられなかった。

神は地球を創造される以前から、アダムとイヴが子孫を持つためには、ふたりが堕ちる必要のあることを知っておられた。それ故イエス・キリストは、地球の創造される以前においてさえも、アダムとイヴの堕落による律法の違背に対して御自ら正義の律法で要求される償いをするに同意されたのである。聖典には救い主について、「世の初めからほふられた小羊」（欽定訳黙示13：8）と記されている。また、イ

エス・キリストが地球が創造される前に贖いの業をなさることに同意しておられたことは、聖典の中からうかがえる。

（1ペテロ1：19, 20；エペソ1：4；モーセ5：57；教義と聖約121：32；モーサヤ18：13；イテラ3：14）

質問の2番目の点は、要するに「殖えよという戒めが守れるように、主はなぜアダムとイヴのために道を備えられなかったのか」ということである。

主はその道を備えられたというのが、この質問の答えである。

主はこの神権時代にジョセフ・スミスを通して、墮落前後のアダムとイヴの状態について、さらに多くのことを明らかにされた。事実アダムとイヴがエデンの園から追い出され、天使からイエス・キリストのことを教えられた後にふたりが語った言葉を、主は予言者に回復された。そのとき天使はアダムに、イエス・キリストが無条件に彼らの咎を贖われ、また堕ちてから後に犯した罪については、各自の悔改めを条件に贖われることを告げたのであった。

「その日、アダム神を讃めて『みたま』に満たされ、この世にあるすべての眷族に就き予言し始めて言いけるは、神の御名は讃むべきかな。われ罪を犯せし故に、わが眼は開けたり。われこの世に生きて悦びを受け、われまた再び肉体に在りて神を見ん。

彼の妻イヴ、すべてこれらのことを聞き喜びて言いけるは、もしわれら罪を犯さざりせば、われら子孫を得ざりしならん。また善悪の区別も知らず、われらの贖わるる喜びも知らず、すべて従順なる者に神の賜わる永遠の生命も知らざりしならん、と。」（モーセ5：10, 11）

教会教課企画調整主任
ダニエル・H・ラドロウ

礼拝と音楽

《聖典の探求》

ロバート・J・マッシューズ

ブリガム・ヤング大学

古代聖典学助教授



「全地よ、主にむかって喜ばしき声をあげよ。……」（詩篇98：4）音楽は自らの持てる領域を維持しながらも、人の気分や感情を表わすのに話し言葉以上の働きをするときがしばしばある。聖典には、神への愛や敬意を表現した例が数多く見られる。

ソロモンの時代の神殿の奉献の様子が次のように描かれている。「祭司はその持ち場に立ち、レビびとも主の楽器をとって立った…タビデが彼らの手によってさんびをささげるとき……祭司は彼らの前でラッパを吹き、すべてのイスラエルびとは立っていた。」（歴代志下7：6；5：12-13参照）

またほかの時代にも「シンバルと立琴と琴をもって神の宮の務をした……主のうたをうたうことのために訓練され……」とある。（歴代志上25：6-7）

後に、ダビデ王は、ラッパの声をもって主をほめたたえよ、立琴と琴をもって主をほめたたえよ、鼓と緒琴と笛をもって主をほめたたえよ、音の高いシンバルをもって主をほめたたえよ、鳴りひびくシンバルをもって主をほめたたえよ、と言っている。（詩篇150：3-5）

また次のようにもある。「新しき歌を主にむかってうたえ。……主にむかって喜ばしき声をあげよ。……」（詩篇98：1，4）「主にむかって歌え、主をほめうたえ……」（詩篇105：2）「昔ダビデおよびアサフの日には、歌うたう者のかしらがひとりいて、神にさんびと感謝をささげる事があった。またゼルバベルの日およびネヘミヤの日には、イスラエルびとはみな歌うたう者と門を守る者に日々の分を与え……」（ネヘミヤ12：46，47）

「またヒゼキヤ王およびつかさたちはレビびとに命じて、ダビデと先見者アサフの言葉をもって主をさんびさせた。彼らは喜んでさんびし、頭をさげて礼拝した。」（歴代志下29：30）

予言者アルマは、へりくだった従順な人々に対して、そのイエス・キリストへの信仰の故に「贖いを与える愛を讃美する歌を唱」うよう励ましている。（アルマ5：26；26：13参

照) また聖徒らが「子羊の右手に立つべし。この時主はシオンの山と……子羊の歌を唱わん」ということも聖典から知る。(教義と聖教133:56)

新約聖書には次のように記されている:「なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人々が小羊と共におり、……彼らは、御座の前、四つの生き物と長老たちとの前で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかった。」(黙示14:1-3)

末日聖徒イエス・キリスト教会が組織されてすぐに、神はエマ・スミスに次のように教えられた。「汝はわが為に聖なる歌を選びてわが教会の用に供するを得ん。すべて心の歌は、われらの喜びなり。彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん。」(教義と聖約25:11, 12) またイスラエルに対して、主は予言者ブリガム・ヤングを通して、「もし汝心楽しき時は歌を唱い樂を奏し舞踊を舞い、讚美と感謝の祈りをもて主を讚め称えよ」と言っておられる。(教義と聖約136:28)

音楽により主を讚美することについては、聖典の中で多く語られているが、ここで私たちはよく識別しなければならない。なぜなら、すべての音楽が礼拝に適切であり、称賛に値するとは限らないからである。レーマン、レミュエル、そしてイスラエルの息子たちとその妻たちは、「……心が浮かれ、おどきをおどり歌を唱い無礼な話を始め、果ては非常に粗暴となるに至った。」(I ニーフアイ18:9) そして旧約聖書では、アモスが邪悪になったイスラエルの民に、主は「あなたがたの歌の騒がしい音」や「あなたがたの琴の音」を聞いたまわないと警告した。(アモス5:23)

音楽は人の霊を高め、勇気を与えてくれる。サウル王が気落ちしているときに、ダビデは、琴をとって奏でたのでサウル王は気が静まった。(サムエル上16:23)

パウロとシラスは、ピリピの牢獄にいたとき、「真夜中ごろ…神に祈り、さんびを歌いつづけた……」(使徒16:25) またジェレドの民は大海原を渡るとき、「一日中主に讚美の

歌を捧げ」た。(イテル6:9)

しかし、捕われの身であったユダヤの民は、彼らを捕えた人々のために歌うことはしなかった。「バビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した。われらはその中のやなぎにわれらの琴をかけた。われらを取りこにした者が、われらに歌を求めたからである。……『われらにシオンの歌を一つうたえ』と言った。われらは外国にあって、どうして主の歌をうたえようか。」(詩篇137:1-4)

音楽は福音を教えるのに使われる。使徒パウロは、聖徒たちにこのように書き送った。「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい。」(コロサイ3:16) 「主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。」(エペソ5:19) と書いている。

ソロモンの時代の、神殿奉獻の際の音楽についてはすでに述べた。イエスと十二使徒は最後の晩餐をとった後、讚美の歌を歌った。(マルコ14:26参照) モロナイもまた、教会の集会での音楽について語っている。「聖霊の力が導くままにあるいは道を説き……あるいは讚美の歌を唱った。」(モロナイ6:9)

聖典はシオンの贖いの歌について告げている。「あなたの見張りびとは声をあげて、共に喜び歌っている。……声を放って共に歌え。主はその民を慰め、エルサレムをあがなわれたからだ。」(イザヤ52:8, 9)

「主はシオンを慰め、……その中に喜びと楽しみとがあり、感謝と歌の声とがある。主にあがなわれた者は、歌いつつシオンに帰ってきて……」(イザヤ51:3, 11)

その日聖徒らは、「声を挙げ共に声を合せてこの新しき歌を唱わん。……主は再びシオンを興しませり。主は恵みもてその民イスラエルを選……」(教義と聖約84:98, 99) ばん。

涙に曇る目は 見ることが できない

エレイン・キャノン

夫の死はつらい出来事です。本当の悲しさは本人にしかわかりません。そのような別離にあたって気丈に苦しみを乗り越えるには、いくつかの道があります。時間も死の傷跡を和らげてくれるでしょう。しかし、いつか再び会えるという知識こそが、別離に耐える力を与えてくれるのです。日の栄光の結婚をした夫婦は、自分たちがいつか再びまみえることを知っています。ですから、この上ない寂しさに見舞われたときに私たちの必要とするものは、単なる慰めではありません。必要なのは、寂しさに耐えかねて自己を見失うことなく、心に平安と希望を得るための導きであり手段なのです。

どの婦人も自分なりの方法でそのチャレンジに立ち向かわなくてはなりません。以下の記事は、教会幹部の未亡人がいかにして悲しみに打ち勝ち、意義ある豊かな人生を築いているかの紹介です。



御恵みを

数えあげましょう

「夫が就寝中に急死したとき、私の世界は閉ざされてしまったように思われました」と、十二使徒評議員マシュー・カウリー長老の未亡人エルバ・カウリー姉妹は語ります。「私はいつも外出するのが好きでしたが、陽の光がさんさんと降り注ぐ日さえ、かえってその空の青さが私の心に重くのしかかってくるのでした。人々を見ると、どうしてあのように笑いながら道を歩けるのだろうと不思議でした。」

それは20年近く前のことでした。今カウリー姉妹はこう言うのです。「愛する人の死は、人々がこの世で経験する幾つかのことに比べれば、楽なものです。そのことを知ったのは、初等協会小児病院で働き始めたすぐのときでした。私はその仕事を持って初めて、人生に新たな喜びを見出したのです。」

カウリー長老の葬儀を終えてすぐ、エルバ姉妹は家でふさぎこんで悲しんでばかりもいられない事態に直面しました。彼女には養育しなくてはならない養子があり、生活をなんとかしなくてはならなかったのです。彼女は初等協会小児病院の理事の仕事につき、障害児の母たちの、悲痛や死に立ち向かう態度が違っていることに、心を留めたのでした。

「ある人は何かを得、そこから大事なことを学びます。でもある人はただくじけてしまうだけです。ある日のことでした。若い母親が、気の毒に見たこともないほどひどい奇形の赤ちゃんを抱いて来て、私に言いました。『私は天のお父様が私を愛しておられることをよく知っています。だって神様は私がこの小さい霊を愛して大切にするとわかって、この子を送って下さったのですから』と。その日からです。私は自分の受けている恵みを数え始めました。何とたくさんの恵みがあることでしょう。主はそうように、私をも愛して下さいなのです。私はサタンが誘惑に使う暗いよくない気持を、心に起こ

してはいけないと知りました。」

カウリー夫妻は大の収集家でした。アパートは世界中の興味深い品々で埋まっています。ロイヤル・ドルトンの水差しのすばらしいコレクションや、ニュージーランド滞在中にファンになったマオリ文化の珍しい品物が並んでいます。今、そのひとつひとつを見ながら、それを買った場所や情景を考えると、カウリー姉妹の胸には、ふたりで伝道部をまわり、世界各地の聖徒を訪れた旅の数々が鮮やかに浮かびあがってくるのです。

「初め、このようなコレクションに囲まれているのは苦痛でした。でも今は慰めになっているのですよ。これらの品は日記のようです。聖徒たちと共にしたすばらしい神聖な経験の記録なのです。思い出がたくさんあれば、ひとりぼっちもそうこわいものではありません。」

小柄で可愛らしく、実際の年齢よりも若く見えるカウリー姉妹は、暇を待たないことが大事だと考えています。彼女は神殿職員で、デパートのダイヤモンド売場で働いています。「どん底に沈めば、忙しい生活が、また上に引き上げてくれるでしょう」と、彼女は語っています。

マシュー・カウリー夫人



信者の模範と なりましょう

「やもめになるという大変な苦しみに勝つ方法はただひとつです。福音に生きることです。そうすれば主が平安を与えて下さいますよ。」1968年に死去するまで十二使徒評議員会補助の任にあったウイリアム・J・クリッチロウ・ジュニア長老の妻、アンナ・マリ－・クリッチロウ姉妹はこのように語ります。

クリッチロウ夫妻はすてきな恋愛小説の中に出てくるような44年間を送りました。姉妹が17歳で、すでにステ－キ部の系図プログラムのエキスパートになっていた頃に、日曜学校のハイキングで初めて会って以来、ふたりはずっと恋人同士でした。

今クリッチロウ姉妹が一番なつかしく思い出すひとつのことは、いつもふたりきりでとった昼食のことです。夫妻はそれほど一緒にいることが楽しかったのです。でも現在は、3人の子供と大勢の孫たちが集まってきては面倒をみたり、様子を気づかってくれます。

クリッチロウ姉妹は神権の賜をよく理解しているだけに、温和と上品さを備えた穏やかで威厳のある婦人です。彼女はこう言います。「私はこれまでの生涯を、いつも神権に感謝して過ごしてきました。今はひとりなので、神権は前よりももっと大切です。愛する夫と死別して悲しんでいる女性にお勧めしたいことがあります。必要なときには神権の癒しの儀式を受けて下さい。寂しさは変わらなくても、心は平安になります。私は9歳の年に脊髄膜炎という重病にかかって、医師は、治ったとしても歩くことも聞くことも見ることもできなくなると言いました。そのときに、神権が立派な医師よりも大きな力を持つことを知ったのです。私は

祝福を受けました。そして医師たちが宣告した数々の問題は皆拭い去られたのです。私はいつも、必要なときには神権の助けを求めてきました。」

彼女は総大会やテレビのブリガム・ヤング大学の宗教番組をめったに欠かしたことがなく、福音についてさらに多くのことを学ぼうと、いつも日曜学校に出席しています。「福音を知らなければ守れない」からです。

「思い出すとどうしても悲しくなるといえば、祖母のジェブソンおばさんのことです。彼女は42の年で、11人の子供をかかえて夫に先立たれました。福祉も保険金もなかったのです。」クリッチロウ姉妹はこう回想します。他の人の心、特に信者の模範である人の心から私たちの心に、何という慰めの糸が引かれることでしょうか！



ウイリアム・J・クリッチロウ・ジュニア夫人



熱心に 仕事をしましょう

『『私たちが強さを求める。すると神は私たちを強くする困難を与えて下さる。私たちが勇気を願う。すると神は打ち勝つべき危険を与えて下さる。私たちが恵みを求める。すると神は機会を与えて下さる。』私はジェール・ジョンソンのこの言葉を、カレンダーの脇に置いています。』マダリン・B・ワースリン姉妹は続けてこう語ります。「今ひとりになって、この言葉が本当だと前よりもよくわかるようになりました。これは私にとって大きな励みです。私はこれまでの人生よりも今の方が、学ぼう、人格を高めよう、良い生活をしようともっと努力していると思うのです。ワースリン監督は今私のために場所を用意しています。ですから準備したいのです。」

こう語るのには、教会の前管理監督ジョセフ・L・ワースリン監督の未亡人です。夫妻には5人の子供と27人の孫がいます。既婚者は皆神殿結婚をしています。子供たちは全員伝道に出て、修士号や博士号を取得しました。ワースリン姉妹は、「私たちは子供を育てる上で福音の原則から離れることはできません。死という試練や寂しさを避けて通ることもできません」と言っています。

活気にあふれて気丈な彼女は、今年イスラエルへの旅行を計画しています。彼女は、別離の試練は避けて通れないのだから、自分を順応させて、つましく己れを保つべきだと考えています。彼女は昔と同様現在も多忙で、多くの良い仕事に熱心に携わっています。

「私は死をこわいとは思いません。自分は福音を理解していると思いますし、会う方たちにはだれにでも福音の真理を追求しなさいと勧めます。夫とまた会えるときが楽しみです。夫が初めて伝道に出たとき、私は夫を待ちました。これまで夫が教会の責任に携わ

ってきた間、数え切れないほど何度も夫を待ったものです。今回は、ほんの少し長く待つことができます。夫がいなくてとても寂しいですが、悲しくはありません。私たちが正しく生活したなら、この世にも次の世にも約束された祝福が必ず実現すると心から信じているからです。

夫が自分の召しや主の勧告に対して尽くした献身を、私はよく知っています。私はずっと夫を支持してきました。進歩しよう、必要なら友だちや家族の人たちを助けよう、国家のためにも良いこと、大切なことを支援しようと努力している私を、夫はきっと支持してくれていると思います。それが神様の計画じゃありませんか。死に出会うとしばらくの間はそれで終りのように思えるかも知れませんが、長い目で見れば、事の全容がわかってきます。私たちの責任は、創造主と会う用意をすることです。再び会えるということは、すばらしいことではありませんか。」



ジョセフ・L・ワースリン夫人



信仰の試しに 打ち勝つこと

故十二使徒評議員リチャード・L・エバンズ長老の妻アリス・ソーンリー・エバンズ姉妹は、ひどく使い古した感じの三大聖典の合本を手にとって次のように語りました。「イテル書12章6節を読みたいと思います。『……それであるから、あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないと証明が得られないからである。』長年愛してきた夫を失うことは、人の信仰の度を試すものだとすることを、私は今知っています。この信仰こそ、そのようなときに私たちが頼りとしなくてはならないものです。私たちは4人の息子に、信仰の上に立って生きることの大切さを教えてきました。短い話をして、信仰についての自分の証を話してきました。そして突然、夫の死と共に、私に大きな試練がやってきたのです。気持ちを落ち着かせるのが難しいこの時期に一番の助けとなったのは、夫のリチャードもキリストと同じく生きているという確信でした。けれども、その信仰がない人たちはいったいどうするのでしょうか。」

エバンズ家は楽しい雰囲気の中に包まれています。書籍や音楽やおいしい食べ物、匂いがいっぱいです。友だちからははっきりなしに「アリスの様子を尋ねる」電話がかかり、孫や多忙な息子たちはおやつをつまみに立ち寄りたり訪問したりします。一家の柱を失った大きな悲しみにも、慰めに訪れる友人たちの心をなごます愛と信仰の雰囲気があるのです。

リチャード・L・エバンズ長老は、教会だけでなく社会的にも重要な人でした。その「最愛のアリス」は、将来あるバイオリニストの地位を投げ打っ

て、重責に当たる夫を助けたのでした。現在彼女には夫の未整理の個人ファイルが90箱分もあり、出版社やレコード会社の締切りが迫っています。悲しくても仕事はしなければなりません。

アリス・エバンズ姉妹はこう話しています。「仕事は恵みです。また聖書にあるように『行ないのない信仰は死んだもの』です。信仰について話すばかりではいられません。それを人生の問題に応用しなくてははいけません。パウロは『わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができ』と言っているでしょう。ですから夫が死んで自分の生活が変わったとき私はあるものを拾い集めてはかのことを始めたのです。」

教会幹部とその妻は、人々が問題を持っていること、世界を手中におさめたと見える人々さえ問題を抱えていることを知る立場にあります。アリス・エバンズ姉妹も、問題に悩む人々、特に未亡人や独身女性を心にかけて、多くの時間を費やし、素晴らしい愛と善意を分ち与えています。エバンズ姉妹は言っています。「自分が人々の愛に包まれてきたことを思い、今自分の寂しさを年をとった独身女性の寂しさに比べてみると、その人たちの問題は私より大きいことがわかります。私たちはいろいろな形で信仰を試されるのだと思います。その信仰の試しに打ち勝つことは、私たちそれぞれの課題です。」

リチャード・L・エバンズ夫人



良い言葉を

語りましょう

七十人最高評議員会会員のオスカー・A・カーカム長老が死去したほんの3カ月後に、夫人のアイダ・マードック・カーカム姉妹は、「良き言葉を語れ」という本を書いて出版しました。この標題は、そのままカーカム夫妻の人生の標題でもあります。

「やもめになって気落ちしたときでも、自分のことはあともわしにして、ほかの人に喜びを与えてあげて忘れるはいけません。それが福音の心髄ですよ」と、カーカム姉妹は言います。彼女の夫は13年前に亡くなりました。それ以来、姉妹はふたりの習慣を守り続けて、折あるごとに聖句や良い言葉を人々に贈ってきました。聖句を小さなカードに書いて、必要としている友だちに送る仕事は、本当に大勢の人の助けとなってきました。

カーカム姉妹は、「良き言葉を生かしたい」という夫の願いを大事にする立派な勇気ある婦人です。彼女は娘のグレース・バービッジ姉妹の協力を得て、カーカム長老の葬儀が終わった直後に、出版本の構想をまとめ始めました。だれかが幸せになるまで、悲しみを乗り越えるまで見届けることは、太陽をふりまくことと同じように賢いことではないだろうか、カーカム姉妹は言います。「そうしたときに、きっと自分で何かの気持を感じます」と。このような彼女が最近重病に伏したとき、「水の上に投げたパン」が、花となり、カードとなり、数々の友人となって返ってきたのです。

夫の生前、夫妻は共々多忙でした。カーカム長老は人々から愛される宣教師、スカウト指導者であり、姉妹は「ユタ開拓少女団」(Daughters of Utah Pioneers)会長でした。姉妹は今もその顧問をしています。この奉仕という共通の関心と、「良き言葉を分け与える」ことが、夫妻を強くひとつに結び

ました。

カーカム長老が死去するわずか前、家族が集まって結婚記念日を祝いました。カーカム姉妹は1枚の聖句カードを用意し、カーカム長老は家族の祈りの中でそれを引用して、父親としての祝福を施しました。カードに書かれた聖句は、そのときの神聖な思い出を呼びさましてくれます。「願わくは主があなたを祝福し、あなたを守られるように。願わくは主がみ顔をもってあなたを照し、あなたを恵まれるように。願わくは主がみ顔をあなたに向け、あなたに平安を賜わるように。」(民数6:24-26)

オスカー・A・カーカム夫人



神に近よりましょう

「夫は口ぐせのように、この聖句を守ろうと努力すれば、万事が必ずうまくいくと言っていました。それは教義と聖約の88章67節です。『而して、もし汝ら誠心誠意わが光栄を顕さんとすれば、汝らの全身光明に充たされて汝らの中に暗黒なく、その光明に充ちたる体はすべての事を理解せん。』この聖句は、私たちにいろいろな問題を解決する鍵を与えてくれます。私たちが神様に近よれば、霊に暗闇はなくなりますし、神様の目的を見誤ることもありません。」

十二使徒評議員ジョージ・F・リチ

ジョージ・F・リチャーズ夫人



ャーズ長老(リグラン・リチャーズ長老の父)の未亡人ベッツィー・H・リチャーズ姉妹は健康があまりすぐれませんが、いろいろな良い書物を読むことが好きで、特に福音についての書籍を読み、心を励ましています。

リチャーズ長老と1950年に死別してひとりになった姉妹は、子供たちの訪問を楽しみにし、彼らの暖かい親切を感謝しています。彼女は死を少しも恐れず、互いに愛し合い互いを頼るようになった夫婦を離す神の計画に、不満を感じてもいません。むしろ貴重な教訓を学ぶ機会をありがたく思っています。そして時々神殿を眺めては、未亡人にとってあそこで行なわれる神聖な儀式はどんなに大きな慰めだろうと考えるのです。

リチャーズ姉妹はヨークシャーなまりで、快活に語ります。「福音を理解せずに夫と死に別れた人は、ぜひとも福音を勉強して、それが正しく理解できるように天父に助けを求めるべきです。私は福音が大好きです。何もかも

天のお父様とお話する前に自分の聖典を開くと、心が高まります。キリストの御名を受ければ死に打ち勝つことができますし、みたまが注がれて理解が深まり、平安を得るでしょう。」

共に織りなしてきた大切な交わりの糸が死によって断ち切られるとき、人はすばらしい高さにまで上がることができます。信仰を持つ人にとって、おのずと涙が浮かぶとき、必要なのは思い出だけなのでしょう。福音は真実です。私たちに見ることさえできるならば、答えも希望も暗黙のうちにそこにあるのです。

涙に曇る目は、それを見ることができません。



キャノン姉妹は教会の婦人団体「ラムダ・デルタ・シグマ」(Lambda Delta Sigma)の顧問であり、以前は「ニューエラ」の編集者として働いたこともある。

系図を調べましょう

マーガレット・ウェルズ姉妹は物柔らかに語ります。「系図の仕事をするれば、決して寂しくなりませんよ。私は系図を調べて、じかに会ったことのない友だちと知り合いになりました。その中には、私の生まれるずっと前に亡くなった人たちもいます。」

管理監督会のジョン・ウェルズ長老が亡くなって未亡人となった1941年の翌年、姉妹は神殿職員として働き始めました。「福音を受け入れてユタに移住してきた先祖にずいぶんお世話になっていると思うのですよ。自分ではできなかったことをその方たちのためにしてあげることはすばらしい経験ですし大きな生きがいなのです。」彼女の家には4つの引出しに資料がぎっしりとファイルされ、よく書き込まれた家族の歴史が9冊もあります。「でも今までした仕事で何が一番すばらしいかといえば、年取った私の母を7年間、100歳近くで亡くなるまで世話したことです。」

寂しいときの慰めには、「何か待ちかねたり、用意したりできるように、前もって日程を組んでおくこと」も役立ったと、ウェルズ姉妹は言っています。そういう彼女の趣味はドライフラワーを作ることです。花は「神様の被造物」だからとのことです。また彼女は、家の「整頓」と家族の健康管理はすべての女性の義務であるとも考えています。

27年間YWMIA中央管理会で働き伝道にも出たウェルズ姉妹は、幸福の秘訣は心穏やかに生活することだと確信しています。「過去を後悔したり、未来を恐れてはいけません。人生は喜んで生きなければ。マーガレット、君のどういう所が好きかという、毎朝気持ちよく目覚めることも、ひとつなんだよ。」彼女は夫によくそう言われたものでした。彼女はそれを自分の責任とと思っています。詩篇118篇24節にも、



ジョン・ウェルズ夫人

「これは主が設けられた日であって、われらは、この日に喜び楽しむであろう」と書かれてある通りに。

未亡人にとっては、特別な日が最もつらい日ともなるものです。誕生日を忘れたり、クリスマスプレゼントがなかったりということは、どんなに心を強く持とうとしても気持ちをくじきます。でもウェルズ姉妹はこの問題もひとりで解決しました。「誕生日やクリスマスが来ると、私はジョンからのすてきなプレゼントを自分で買うのですよ。私にくれたいだろうなと思う何かを。これまでの32年間、一度も無視されたと感じたことはありません。」彼女はそう説明します。

ウェルズ姉妹は神殿職員を解任されてから、ワード部やステーク部の系図プログラムに携わってきました。彼女は2マイルの精神で、夫婦や家族のシート作成を手伝っては那些人たちを神殿に連れて行ってあげます。少し遅れたりするときには、「準備ができたなら教えて下さいね」と促します。

ドン・タイの ねがい (中国のお話)

話 フェイス・イングリム・ヌープ

絵 ジンジャー・ブラウン

「ぼくね、チュン・イェン祭の行列
のとき、竜のしっぽに入るんだよ。」
大声でおばあさんにこう言ったドン・
タイは、それからちょっと顔をくもら
せました。「ミン・キーみたいに学校
に行きたいなあ。学校に行かないとえ
らい人になれないもの。」

ドン・タイの一家はいなかから香港
きゅうろんの丸竜にひっこしてきて、おとうさん
とおじいさんはここの工場で働いてい
ました。ところがこの町にはどんどん
人が集まって来るので、学校がたりな
くなくなっていました。そこでドン・
タイもすぐに学校に入るというわけに
はいかなかったのです。

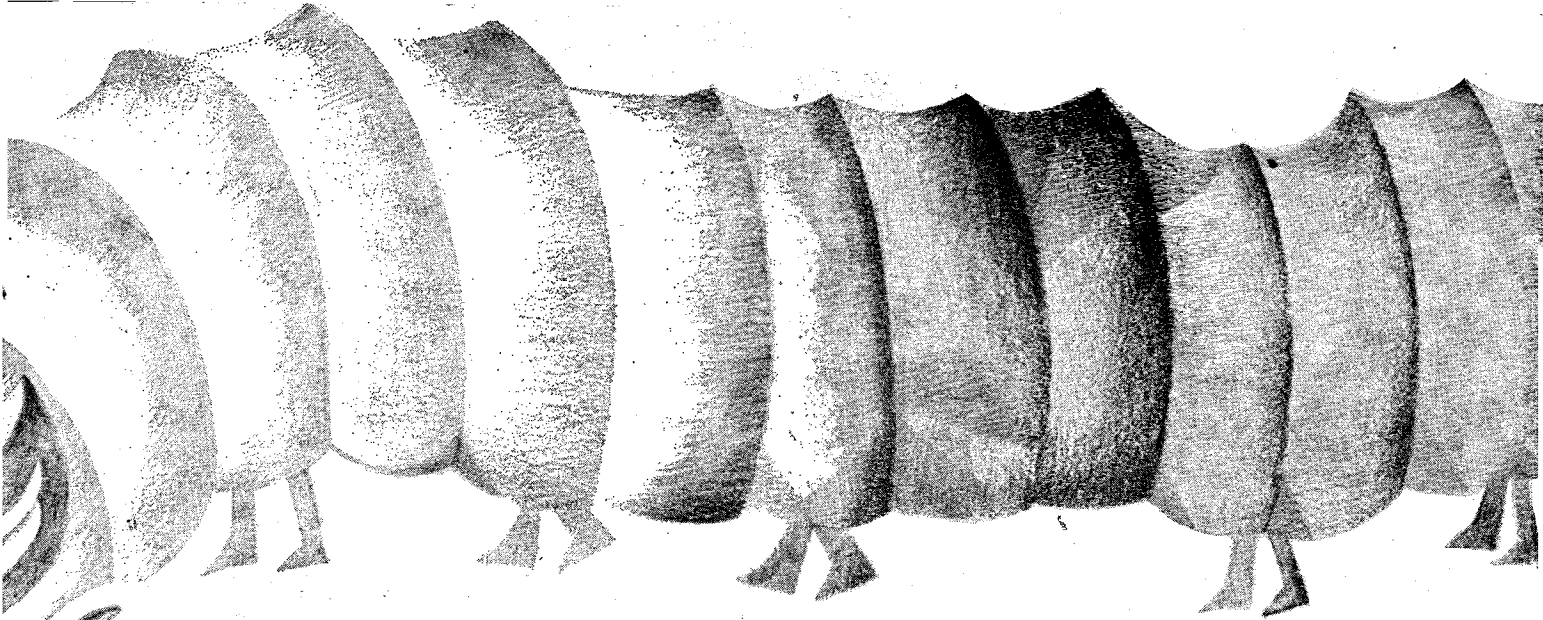
おばあさんは、シチューに入れる青
豆をちぎりながら、「それじゃ、みな
なと足をそろえてうまく竜のしっぽに
なるんだよ」と言いました。

まもなくして、ミン・キーが少し高
くなったげんかんの方から走って来ま
した。

「どうしたの？」 おばあさんがた
ずねました。

「親せきの人が広東かんとうから朝の汽車で
来て、むかえに来るのを待ってますよ、
駅で。おばさんとおじさんと赤ちゃん
とおばあさんが。」 ミン・キーは息を





きらせながら言いました。

これを聞いたドン・タイはふきげんな顔をして、「きょうはお祭でみんな忙しいんだ。きょうに言われたってそんなのこまるよ。夜まで待ってもらおうよ」と言いました。

「それじゃ、わたしがみんなをむかえに行こうかね。」おばあさんは静かにそう言うと、たいぎそうに立ちあがりました。

「おばあちゃん、駅まで3キロもあるんだよ。それにきょうはお祭で人がいっぱいだから、おばあちゃんなんか行ったら、ふみつぶされちゃうよ。」

ドン・タイはあわてておばあさんをとめました。

それからこわい顔をして、ミン・キーの方をふりむいてこう言いました。「ほんとうは親せきなんか来てないんだ。ぼくを追っばらって、自分が竜のしっぽに入りたいから、うそをついたんだろう。」

ミン・キーは目をまるくして言いました。「この耳で聞いたんだ。人力車を引いているぼくのおじさんがみんなを見たって。おじさんは友だちのコックに話してたよ。ほんとうなんだ。」

友だちをうたがった自分がはずかし

くなったドン・タイは、うつむいて言いました。「ごめんね。」そして決心したようにぐんと胸をはり、こう言いました。「おにいさんがいないときはぼくががんばらなくちゃ。うん、ぼくが駅へむかえに行くよ。だからミン・キー、ぼくのかわりに竜のしっぽに入ってくれないか。」

おばあさんはにこにこしながら、銀の竜のうでわを見せて、こう言いました。「わたしの妹もこういううでわをしているからわかるだろう。これわね、うちの家族のしるしなんだよ。」

通りはどこもあふれる人でごったがえしていました。その間をドン・タイはすばやく通りぬけて行きました。乗客をいっぱいつめこんだ二階だてのバスや人力車や、タクシーや手押し車がはうように通りすぎて行きました。

行列が大通りをぬうように進んで行くとき、ドン・タイはその中に大きな竜がおどりながらねり歩くのを見ました。竜の足は、きらきらかがやく竜の体の中に入っているおとなや子どもの足でした。竜のしっぽの中から見えるいちばん小さな少年の足を見て、ドン・タイの心には、思わずくやしさがこみあげてきました。ドン・タイはどん

なにその竜のしっぽの中に入りたかったことでしょう。

ドン・タイはふと、チュン・イェンのいつたえのことを考えました。それは2千年前のことです。山のそばの村に大水と火事が起こり、村はめっちゃめっちゃになってしまいました。ところがひとりの男の人が家族を山に逃がしたので、この家族だけが助かったということです。それ以来、この日を記念して、来年もよいことがありますようにと、人々は山に登るようになったのです。

さん橋の近くに来ると、あたたかい潮風にドン・タイは思わず深呼吸をしました。海岸通りの方に向かって、人々がぞろぞろ歩いていました。この人々は向かいの香港島に渡って、いちばんえんぎのよいビクトリア山に登ろうとしているのです。満員の渡し舟が行ったり来たりしていました。小さなサンパン（舟）が行きかい、ワラ・ワラ（モーターボート）がゴーゴーと音を立てて、忙しそうに人々を運んでいました。

ドン・タイはやっとのことで駅に着きました。ところが駅の中に入ったとたん、どほうにくれてしまいました。



み動きもできないような人ごみの中から、どうやってみんなをさがせばよいのでしょうか。

しかたなく帰ろうとしたとき、ドン・タイはみんなを見つけました。ずっとむこうのすみにおばあさんと同じうでわをした、年とった女の人がいたのです。そのそばにはおとうさんと、赤ちゃんをおんぶしたおかあさんがびったりとよりそっていました。

ドン・タイはみんなの方に歩いて行っておじぎをし、「わたくしが家までごあんないさせていただきます。みなさんのために休むところも用意してございます」と、じょうずな広東語で話しかけました。

おおおばさんは、おばあさんくらい年をとっていました。それでドン・タイは、何度も途中でおおおばさんが歩けなくなるのではないかと心配しました。どこか休める所があればいいのに。そのうちとうとう学校に来てしまいました。休みなので学校の中はからっぽでした。でもドン・タイがとびらを押すととびらは開きました。

「中に入って休んでいきなさい。」ウィルソン先生でした。先生は、ドン・タイに話しかけました。「きみはミン

・キーの友だちだね。どうしてきょう竜のしっぽに入らなかったのかね。」

みんなが休んでいる間に、ドン・タイは残念に思っていることを一気に話し始めました。竜のしっぽの中に入らなかったことや、小さな丘にも登れないことを。

それを聞いたウィルソン先生は、やさしくほほえみながらこう言いました「ドン・タイ、きみは家族のために竜のしっぽに入るのをあきらめた、そうだね。きみはとっても良い子だ。きみのような子が学校では必要なんだ。きみをミン・キーのクラスに入れることにしよう。」

「ありがとう、先生。」とつぜんのことなのでびっくりしたドン・タイは小声でそう言っただけでした。でも、学校で勉強しているときのことを想像すると、うれしさがこみあげてきました。

「それじゃ、みんなを家に連れて行きます。日がくれる前にタイ・モ山に登りたいですから。」

家に向かって歩きながら、ドン・タイはうれしそうに口ずさみました。

「あしたから学校、うれしいな。お正月は、竜のしっぽで行進、行進！」



まつり の 越 過 す ぎ



絵 ラリー・ウィンボグ

1. 過越の祭に、イエスさまがろばにのって、エルサレムにこられると聞いて、たくさんの人々が出むかえました。そしてさげびました。「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に。」

2. 祭の最初の日、イエスさまは祝福してパンをさき、弟子たちにあたえて、こう言われました。「これは、あなたがたのためにあたえるわたしのからだである。わたしを記念するため、このようにおこないなさい。」



6. イエスさまは祈られました。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎさらせてください。しかし、わたしの思いのままではなく、みこころのままになさってください。」



7. イエスさまがもどられると、ペテロたちはねむっていました。そこでおこし、もう一度祈ってくるので待っているように、と言われました。しかしまたペテロたちはねむってしまいました。となかばイエスさまはおこし、目をさましてい

8. イエスさまは3度目の祈りをされました。いっしょうけんめいに祈られ、そのあせが血のしたたりのように地に落ちました。そのとき、御使いが天からあらわれて、イエスさま



3. また ^{さかずき} 杯 を取り、同じようにして、言われました。
「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしをえさせるよ
うにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」



5. イエスさまは、ペテロとヤコブとヨハネをゲツセマネと
いうところに連れて行きました。そして、祈っている間、こ
こで待っているようにと言われました。



4. それから讃美の歌を歌い、オリブ山へ行かれました。そ
こでイエスさまは、御自分がもうすぐ殺され、3日後によみ
がえることを話されました。



9. イエスさまがもどってみると、弟子たちはま
たねていました。それをごらんになってこう言わ
れました。「まだねむっているのか。見よ、時がせ
まった。人の手は罪人らの手にわたされるのだ。」



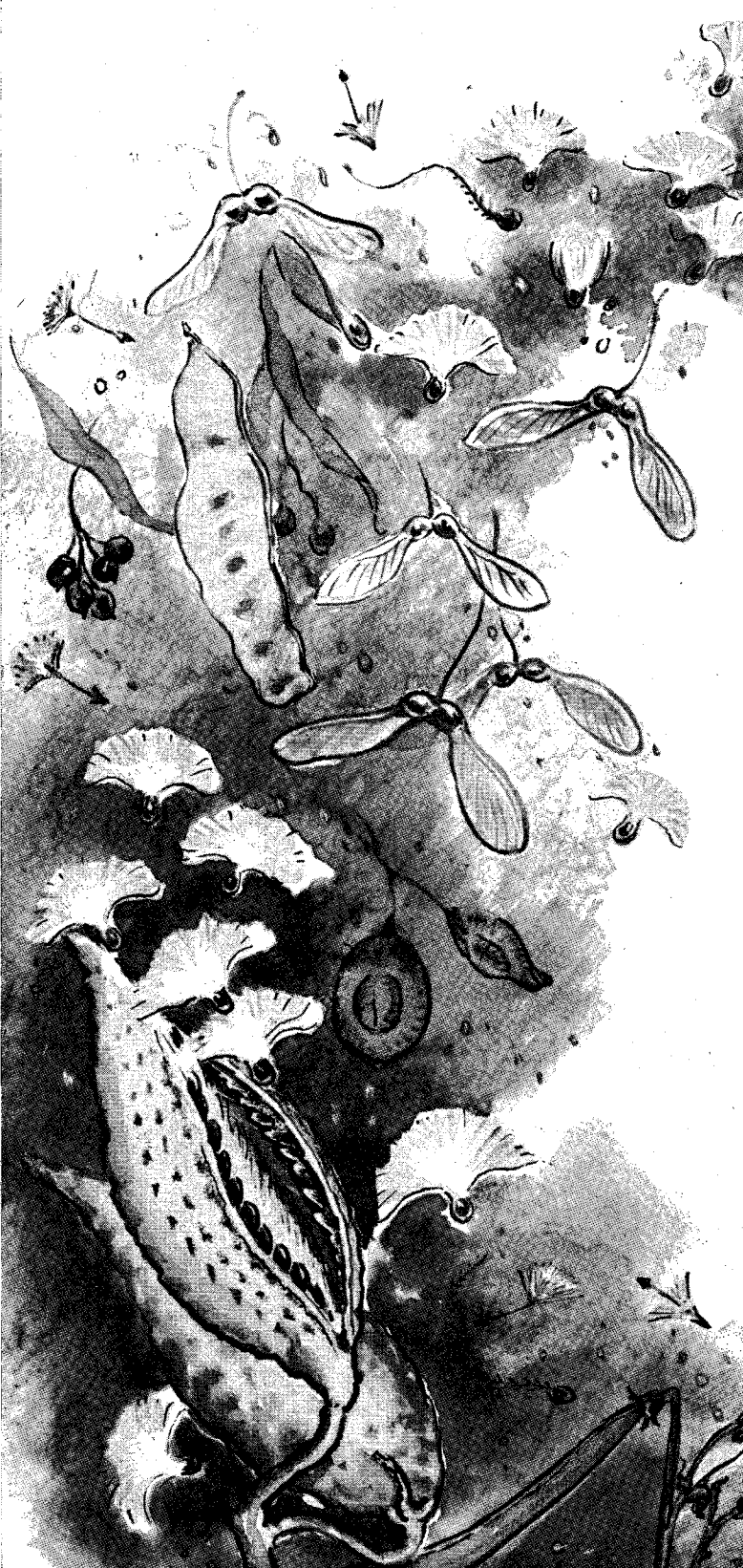
10. イエスさまが話しておられるうちに、十二弟子のひとりのユダが近づい
てきて、「先生、いかがですか」と言って、イエスさまに口づけしました。
すると悪い人たちはイエスさまをとらえて連れて行きました。

マタイ21-26、マルコ11-14、ルカ19-22、ヨハネ12-18

新しいおうちをさがして

絵とおはなし

ペギー・ゲイツェル



植物のたねはね、新しいおうちをさがして旅をするんだよ。だから外がわを見てごらん。かたいからにつつまれているだろう。これはね、とちゅうでかせなんかひいたりしないようにするためなんだ。

すむところがみつかりと、たねは成長して、おとうさんやおかあさんのようになるよ。成長するときには、日光と養分と水とすむところがあるね。

たねの大きさはさまざまだ。小さくて、^{はなげ}羽毛のようにかるいものもあるし、やしの実のようにかたくて重いものもある。色や形だっていろんなものがあるよ。

旅のしかたにもいろいろあるけど、みんな乗りものをつかう。雨や風や雪をね。中には、動物の毛や人の洋服にひらりととび乗って、ヒッチハイクを楽しむたねもあるんだ。だから、ハイキングから帰ったら洋服を見てごらん。きみの洋服に、ちゃっかりとつかまっているかもしれないよ。

やしの実は、波に乗って海をわたっていくよ。もみじは、羽を持っていて、じぶんで風に乗ってとんでいく。

リスは、どんぐりを土の中にうめるね。あれもお手伝いをしているんだよ。小鳥たちだってそうだ。木の実を食べるときは、たねを地面にすてるからね。それに、たんぽぽやけし



のたねには、ふわふわしたわたのようなパラシュートがついている。これは、地面にそっとおりられるようにするためなんだ。

このように、たねは、いろんな方法をつかって旅をしているんだね。でも、じぶんの力で動けないたねは、どうするんだろう。

だいじょうぶ、しんぱいはいらないよ。おひゃくしょうさんたちが、いちばんすみごちのいいところにおいてくれるからね。

だけど、すみごちのいい場所をみつけられたたねは、幸運なんだ。ほかのたくさんのたねは、動物に食べられてしまったり、水におぼれてしまったりする。また、かんかんでりの中で、のどがかわいて死んでしまったり、ほかの植物に養分をとられて生きられないものもあるんだよ。

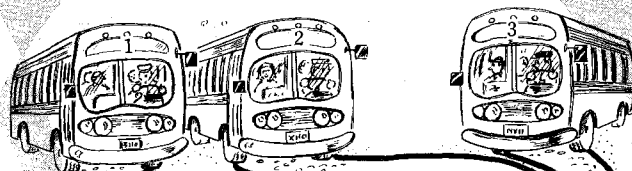
このような死んでしまうたねのことを考えて、しぜんは、あまるほどのたねをあたえてくれる。だから、生き残ってどんなにかまをふやしていくたねが、かならずあるんだね。

こうして新しいたねは、また旅にでる。あるものは波に乗り、あるものは風に乗り、また動物のせなかに乗りながら。新しい場所をさがすためにね。

てんをむすんで
みましよう



ウォルト・トラッグ



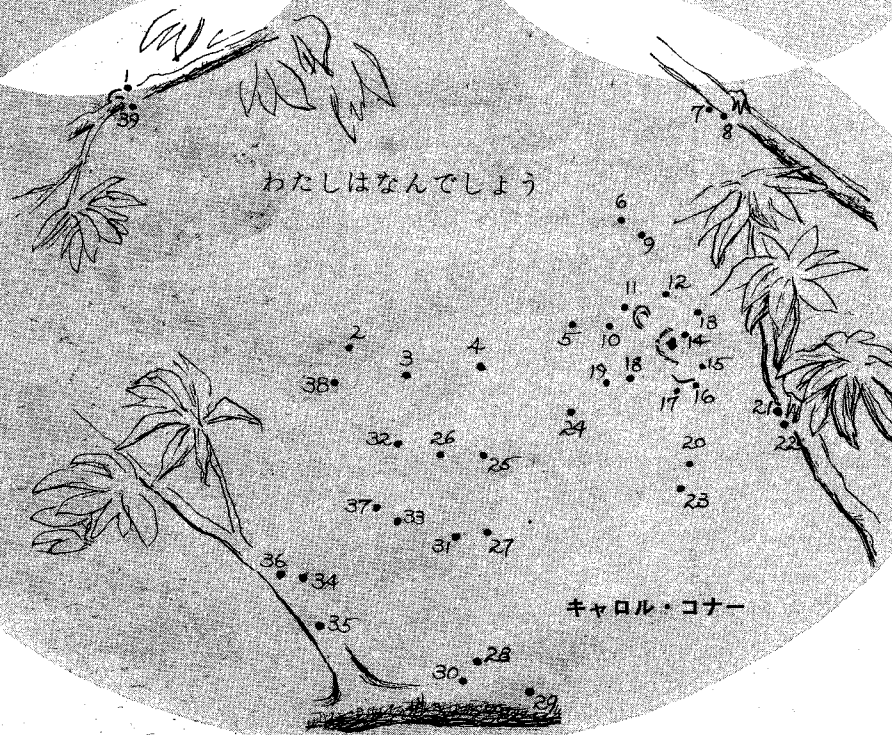
なんばんのバスが
しゅうてんまでい
くでしょうか？
ロバータ・L・フェアラル



しゅうてん

おもちゃばー

わたしはなんでしょう



キャロル・コナー

北大西洋のある穏やかな夜のこと、デビッド・ブラウン船長ははっと目をさました。何と奇妙な夢だろうか！船の乗組員や航海士や自分までが、みんなバプテスマを受けてモルモン教会に入っていた。これはどういうことなのか！それにひざまずいて祈りながらとうとう眠ってしまったすぐ後にこの夢を見たとはどうしたことなのか？ブラウン船長は身を起こし、ベッドにもぐり込んで、この奇妙な夢とインターナショナル号に乗船しているモルモンの団体の持つ変わった雰囲気について、あれこれ思いをめぐらした。

1853年2月25日、大型帆船インターナショナル号は教会員ではない親戚、友人を含めたモルモンの移民団425名の乗客と26名の乗員と共に、引き船に先導されて英国リバプールからマージー川に向かった。順風を待ってマージー川に錨を下ろした船に、みぞれ混じりの雪がたたきつけていた。船室で、56歳の移民団長クリストファー・アーサーは乗客を8つのワード部に分け、それぞれ管理長老とその補佐として祭司、もしくは教師を割り当てた。その内訳は成人309名、子供100名、乳児9名であった。

その3日後、ブラウン船長はアイルランド海峡に向けて出帆の決意を固め強風と荒海の中、数々の難波船を目にしながら5千マイル(およそ8千キロ)の航海に出た。聖徒たちは5、6週間もすればルイジアナ州ニューオーリン

ズに無事上陸できるという希望を持ち、この長い危険な航海に立ち向かう決意を固めていた。9月にはユタに到着するはずであった。

船上での最初の安息日にモルモンの集会が3つ開かれ、全員に公開された。ブラウン船長を初めとするインターナショナル号の乗組員全員は、午後の聖餐会に出席した。他人の気持をそらさない性格を持ち、神を恐れ敬う船長は、旅の早々から移民団の尊敬を集めていた。

その週の後半、たけり狂う大西洋の嵐が、まさに木造船を転覆せんとばかりに襲いかかった。日誌係はこう書いている。3月10日、「東から5時間にわたって強風が吹きつけた。船はひどい横揺れで、海はまるで山のようになり、船は谷底にいるようだった。船の左側に積んだ荷物の大半はロープが切れて旅客デッキの真ん中まで転がった。」

この危険に遭い、神権者は甲板の下に集合して海を鎮めたまえと神に願った。それと前後してブラウン船長が甲板から下りてきて、突如暴風が弱まったと告げた。ハッチは再び開かれた。しかしその晩、インターナショナル号はさらにひどい嵐に見舞われた。こう書かれている。「また部屋に物がぶつかってきて、びんは砕け、缶はつぶれたくさんの物がなくなった。」その光景は前夜よりも恐ろしいものだった。煮たきの火は禁止され、女子供はベッドを出る勇気もなかった。15時間近く

も嵐は猛威をふるった。そして翌日の昼頃になってやっと天候が回復、ハッチが開かれるようになった。船長が祈りながら眠り、あの驚くべき夢を見たのは、生死をかけた2日間をкаろうじて生きのびた後の晩のことであった。

船旅は進んだ。さい先の悪さにもめげず、移住者は明るい雰囲気を見失わなかった。それは夜ごとの集会と安息日の集会に特に顕著であった。異言と予言の賜をもって語ることは珍しくなかった。4週間にわたる船上生活の後、管理長老たちは、ワード部の全員が「病も口論もいささかの不平もなく良い状態にある」と報告した。しかし彼らは、厄介な向かい風のため、平均して1日80マイル(ほぼ130キロ)も進んでおらず、旅が順調でないことを知っていた。イースターの日曜日の3月27日、モルモンたちは午後遅くまで断食して、神の守護を感謝し、順風と平穏な海を祈り求めた。

ブラウン船長も、厳しい航海条件を気づかっていた。4週間経ってもニューオーリンズまでの3分の1を過ぎただけで、前途に24,900マイルの道のりが残っていた。そのため船長が残存食糧を調べさせると、好天になれば丁度足りるだけの量であった。船上の人々は皆憂慮していた。しかし、みたまは再度確信を与えた。3月29日、「異言の賜を持つ者が、主は私たちの断食を喜び、祈りを聞きとどけられたので予想外に速く旅が進むと説いた。」

インターナショナル号の旅

ウィリアム・G・ハートレー

ハワード・ポスト画

しかしその後数日の昼夜にわたる出来事は、この予言を否定するかのよう
に思われた。再び嵐が襲ったのである。
「烈風と大きなうねり、船は大揺れだ。
大勢の船客が船酔いにかかった。……
物はごろごろそこら中を転がった。」
外界はまるで戦場であった。しかし内
に、みたまは働いていた。「フィンチ
兄弟が福音の第一原則を簡潔明快に説
明した」ある集会の後、5名の改宗者
がバプテスマを受けた。4月1日、悪
天候は続いてしたが証会に大勢の船員
が出席し、船大工を含む3人が新たに
バプテスマを受けた。その船大工は乗
組員初の改宗者であった。その翌日、
配給食料が削減された。だがその夜さ
らに3名の船員と1名の船客が証会の
場でバプテスマを受けた。

帆船上でどのようにバプテスマを行
なうのだろうか。よくあるのは大樽に
海水を入れてバプテスマを施すか、船
腹にしつらえられた横木を使って海で
施す方法である。その時バプテスマを
受けた人の言葉によれば、インターナ
ショナル号では、儀式は甲板上の「お
よそ9千リットルの水が入る大きな円
形の木製タンクの中で」行なわれた。
なぜそのようなタンクが船内にあった
のかは、私たちが推測するしかない。し
かし海水を満たしたタンクは絶好のパ
プテスマフォントとなったのである。

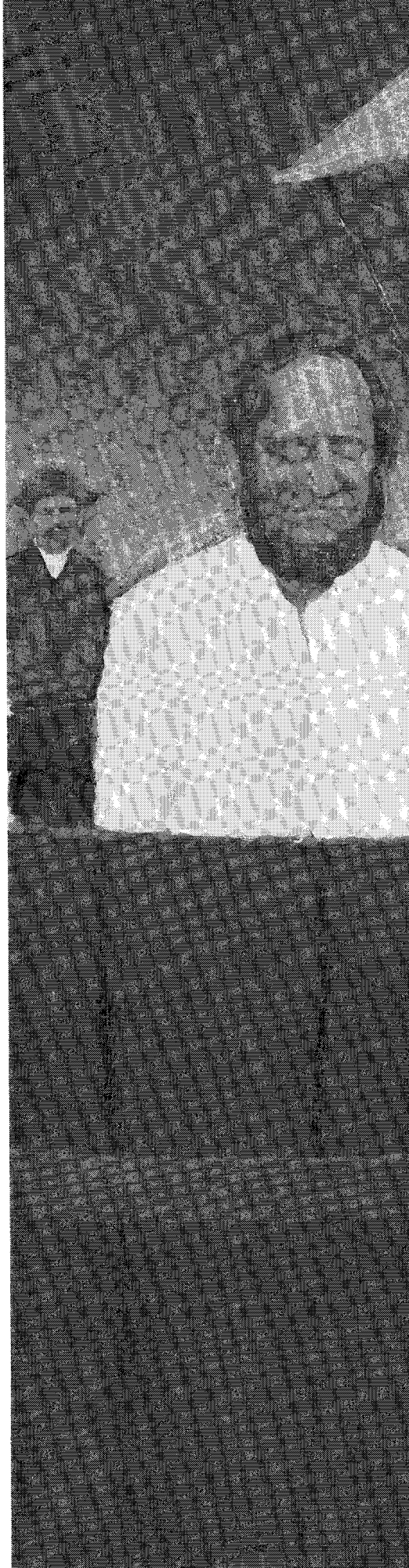
4月の第1日曜日、リバプール出港
から数えて5週間目のその日には、ま
だニューオーリンズまで半分の距離に
も達していなかったが、船客甲板で特
別集会が開かれた。船が荒波にもまれ
る中で、大勢が証をした。そのとき、
「団長に代表して良風を祈ってもらお
うという提案が出た。」一致団結して
彼らが神の助けを願うと、「そのとき
実に驚いたことに、主はすぐさま私た
ちの祈りに答えられた。」まだモルモ

ンになっていなかった22歳のクリスト
ファー・アーサー・ジュニアは、後に
このときのことをこう回想している。

「4月3日に順風を願う祈りを捧げ
ると、私たちがまだひざまずいているう
ちに答えがあった。」その夜もう1回
突風があったが、以後はこの上ない好
天に恵まれて、船はスピードをあげフ
ロリダに向かった。聖徒たちは「祈り
が聞かれた」と喜び、インターナシ
ョナル号は続く3日間でそれまでの距離
を進んだ。風をいっぱいにはらんで帆
走する船は、時には1日350キロも進
んだ。

状況は一転し、4月6日、聖徒たち
はさらに大きな喜びをもって終日教会
の誕生を祝うお祭をした。午前中は聖
餐式と4組の結婚式があり、午後は「祈
りと讃美」、歌、スピーチ、朗読、器
楽演奏などの催しがあった。次にとび
きり上等の食事が出たが、それは「船
内のあらゆるぜいを尽くし、腕により
をかけた食事」であった。夜は民族舞
踊や歌や朗読、「スキップダンスをし
て夜のふけるまで楽しんだ。」その日
のおかげで、船員や船長も含めて乗船
者全員の間に友愛と喜びが生まれた。

インターナショナル号が目的港めざ
して西へと船足速く進む間、モルモン
の数はブラウン船長の夢に予言された
ように増え続けた。4月6日のお祭り
の直前に、船長付きのコックがバプテ
スマを受けた。4月8日にはアーサー
団長の16歳の娘メアリー・アン・アー
サーと黒人の乗組員がバプテスマを受
けた。その翌日、2等航海士と3人の
船員とクリストファー・アーサー・ジ
ュニアがバプテスマを受けた。さらに
1週間して、インターナショナル号が
キューバとフロリダの間を航行中に1
等航海士が教会員となり、次の日には
3人の船員とひとりの移住者がバプテ





スマを受けた。4月17日は摂氏43度の熱さの中にもみたまが豊かに注ぎ、聖徒たちは「一日中第1等級の集会を開いて、夜になると船大工と船長付きコックとふたりの船員が、御業が真実であることを証した。」

続々と改宗者が出るので、ブラウン船長は困惑した。心境の一端は4月18日の上陸指示の言葉に表われた。それはモルモニズムへの傾倒を物語っている。ある人は日記に彼のことを書いている。「船長は何べんも七つの海を行き来したが、末日聖徒と一緒にの時ほど楽しいことはなかった。」さらに「彼はプライドを持っているのですぐには聖徒になれなかったが、やがて私たちに加わり、グレート・ソルトレークシティへ行くと感じていた。」この日記が書かれてからさらにふたりの船客がバプテスマを受けた。翌晩の証会では6名の船員が証を述べ、その後ひとりがバプテスマを受けた。

船旅が終わる3日前、東の地平線に朝日が昇り始める午前4時半、デビッド・ブラウン船長はアーサー団長からバプテスマを受けた。その夜、船長と他の2名が教会員として確認された。そして、インターナショナル号の改宗物語のクライマックスを飾って、船長と船大工が長老に聖任され、1等航海士と2等航海士が祭司になり、コックが教師になった。この集会では船長と大工と数人の船員が証を述べ、スウェーデン人と黒人乗組員が船上で最後のバプテスマを受けた。

インターナショナル号は4月23日午後5時、54日間の航海を終えてニューオーリンズに入港した。アーサー団長は聖徒たちと乗組員の航海中の態度を大いに喜んだ。彼は英国伝道部のサミュエル・W・リチャーズ伝道部長への公式報告書の中で、特に船長をこうた

たえている。

「聖徒たちと共にリバプールを渡った人で彼ほどに聖徒たちから愛され、私たちと親しくうちとけた人物はいないと、申し上げることができる。」

報告書は、みたまの働きと聖徒たちの模範的な行動が相まって外洋での驚くべき数々の改宗が生まれたことを記録している。アーサー団長は誇らしげにこう記した。

「このようなことをお知らせできるのは喜びである。われわれは3人（司廚長とその妻、彼らはふたりとも熱心なカトリック教徒である。および3等航海士、彼は実に悪い人間である）を除く船上の全員にバプテスマを施した。船長、1等航海士、2等航海士、18名の乗組員がわれわれに加わり、その大半はすぐにも盆地へ直行するつもりでいる。……船大工と8名の船員はスウェーデン人、ドイツ人、オランダ人である。黒人が2名おり……バプテスマを受けたその他の人々は兄弟らの友人である。故国をあとにして以来、バプテスマの数は48名にのぼった。」

6週間前にデビッド・ブラウン船長が見た夢の予言は、94パーセントの確立で実現したのである。

資料：教会記録保管庫所蔵の「リバプールからニューオーリンズまでのインターナショナル号の旅日記」（著者はジョン・ライオン長老と推定される）、「インターナショナル号、航海日誌1853年2月21日より1853年10月9日まで」（移民団書記ジョージ・シムズ長老のものと思われる手書きの小日記）、手書きの乗船者名簿。「コントリビューター」1892年8月13日号に掲載されたアーサー団長の航海報告463—65。ユタ州歴史協会所蔵のクリストファー・アーサー・ジュニアの自伝からも情報を入手した。ほかにインターナショナル号のような船上の乗客の生活を記述したものを含めて、英国からモルモンの移民についての書物2冊。ティラー「西方に望みをかけて」（1965年）、ガスティブ・O・ラーソン「王国への幕開け」（1947年）

聖きみたまに導かれ

ミルトン・R・ハンター
七十人最高評議員会会員

数年前、4月のある日の午後遅く、私は他の3人と共に小さな丸木舟を降りた。そこは、メキシコのチアパス州を流れるウスマシタ川に面したアグアアズルという町であった。私たちはそこで小さな単発機に乗り込み、機首を西方数百キロ、チアパス州のグリハルバ河畔のタクストラの町に向けて飛び立った。

私たち、ユタ州スプリングヒルのアーネスト・A・ストロングステーク部長、新世界考古学財団のガレス・W・ロウ氏、そして、ウィリアム・A・(ビル)デベニッシュと私の4人は、その日の朝タクストラを出発したのだが、私たちはそこへ戻るために、世界でも有数の深いジャングルの上空を飛び、数々の山を次から次へと越えて行かなければならなかった。

厚い黒雲がジャングルの上に低く垂れ込めていた。何か災難にでも出会いそうな予感がした。パイロットのビルは、安全を考えて高度を上げ、雲の上に出た。私たちは厚い雲に視界をさえぎられて、終始地上を見ることができなかった。タクストラ空港から発信する電波の周波数は、私たちの飛行機の受信機とは合わなかった。そのため、私たちのパイロットは大よその方向を定めてタクストラへ帰るよりほかなかった。

数時間飛行を続けると、夕暮れが、熱帯地方特有のあの恐ろしいほどの早さで迫ってきた。そのとき、突然、聖きみたまが私に語りかけてきた。私たちはすでにグリハルバ川を越え、さらにタクストラ西方の山岳地帯に向かって飛行中であり、もし、すぐに進路を変えなければ全員死ぬと言うのである。

私はすぐさまビルに向かって、私たちはコースを間違っており、タクストラの南方、かなり上流地点でグリハルバ川を越えたと言った。ビルはコースを変えようとしたが猛烈な悪

天候のため、どうしようもなかった。

私は非常に重苦しい、暗い気持ちに襲われた。陰うつで、絶望的な気持ちであった。私はストロングステーク部長に言った。「もしこのまま進んだら、私たちは皆死んでしまいます。私たちは滅亡に向かって進んでいるのです。今すぐにも進路を変えなければ、墜落して死んでしまいます。」

ストロングステーク部長も、何か重苦しい気分がすると言い出した。私たちは後部座席に座っていたが、ビルは私たちの会話を聞きつけて尋ねた。「ハンター長老、どの方向にコースをとったらよいのでしょうか。」

私はすぐに答えた。「直ちに右へ進路をとって、北上して下さい。」

ビルは機首を右に向けた。暖かく安らかな気持ちが私の心の中に入り込んできた。そして聖きみたまにより、私は万事が好都合にいくことを知った。私は、「もうこれで何もかも大丈夫です。何の事故にも遭わずに、無事タクストラに着けるはずですよ」と言った。程なくして、タクストラの町のあかりが見えてきた。狭くて、ほこりっぽい滑走路の上空を何度か旋回した。滑走路には着陸地点を示すあかりがついていた。もう、外は全くの暗やみであった。

私たちの乗った飛行機は無事に着陸した。あたりを見回すと、滑走路には300から400人の人々がいた。やはりステーク部長の職にあったストロングステーク部長の子息バートもその中にいて、私たちが無事に戻ったことを非常に喜んでくれた。私たちはバートに、なぜ滑走路にこんなに沢山の人が集まっているのか尋ねた。バートの話では、その日の朝私たちと同じ頃、3人のメキシコ人が双発機に乗り込み、ジャングルと山越えにウスマシタ川に向かって飛び立ったが、まだ帰って来ないので、タクストラの人たちは皆、外に出て待っているということであった。数カ月後、ガレス・ロウ氏から



手紙があって、そのメキシコ標は山に激突し、全員死亡したとのことであった。

こうして私たちは、聖きみたまによる導きに心を留めたことで、生命が救われたのである。私たちはホテルに着くと、ひざまずいて、導きを与え私たちの生命を救って下さった神に感謝の祈りを捧げた。

私たちはデビット・O・マッケイ大管長から、古代のセラヘムラ市と推定される遺跡を調査するよう責任を与えられていたが、その与えられた任務を完了したのである。（Ⅲ ニーファイ 8:8）

私たちは、マッケイ大管長が送って下さった書類の記述に従って、その推定地点をつきとめた。しかし4人とも、その場所は、セラヘムラのような大都市を維持するには小さすぎるといって、意見が一致した。その上、セラヘムラには穀物を栽培した畑があり、市の両側にはニーファイの民のための牧草地もあったはずである。モルモン経の記述に従えば、セラヘムラは、古代のアメリカではニーファイ民族最大の都市であったと推定されるからである。

ホテルへ帰った後、私は気分が悪くなり、それが一晩中続いた。翌朝、仲間たちが私の寝室までやって来て、なぜ朝食に出て来ないのか尋ねた。私は気分がすぐれず、起きられないと言った。彼らは、先に朝食をとったら滑走路へ出て、飛行機の整備が完了したかどうか見て来ると言って出かけた。

間もなく、彼らは戻って来ると、滑走路上空にもタクストラ上空にも雲が非常に厚く垂れ込めていて、飛行が無理であることを教えてくれた。ホテルのあたりは完全に霧で包まれていた。この様子では、滑走路が相当長期間霧で包まれるのも時間の問題であった。雨期が始まろうとしていたからである。彼らは私にどうしたらよいか尋ねた。

私は、しばらく考えた後、聖きみたまに強く心を動かされ

て言った。「私を祝福して下さい。そして、きょう飛び立ちましょう。」最初彼らは、「ハンター長老、あなたの状態では飛行機の旅は無理です」と答えた。しかし私が祝福してくれるよう強く求めたので、ストロングステーキ部長が油を注ぎ、彼の子息のパートがそれを結び固め、祝福を与えてくれた。私は、すぐさまベッドから立ち上がり、部屋を出て朝食をとりに行った。私は完全に癒されたことを感じとった。

私たちは、荷物を持って滑走路へ出かけて行った。その直後、雲が少し上がって、飛行機の離陸が可能になった。これはその後、あのロウ氏からの手紙でわかったことだが、次に雲と霧が晴れ上がるまでにはもう数日かかったそうである。その日は、タクストラから飛び立つ私たちにとって、正に絶好の日だったというわけである。

その帰途、ストロングステーキ部長が言った。「ハンター長老。今度、教会の雑誌に、私たちのこのすばらしい経験について記事を書いて下さい。あなたは、あのウィルフィード・ウッドラフ大管長と同じくらい強く、聖きみたまに導かれていました。ウッドラフ大管長は、夜寝ていたときに、起きて馬車を動かせと言われ、大管長が聖きみたまの勧めに従って馬車を動かした直後、激しいつむじ風が襲って来て、大木を倒し、その木は丁度馬車を止めておいた所へ倒れましたね。もし大管長が聖きみたまの勧めに従っていなかったなら、大管長は同僚もろとも死んでいたことでしょう。私たちも同じような経験をしました。聖きみたまの勧めに従うことによって、私たちの生命は救われたのです。」

教会の若人よ、もしあなたが神の戒めをすべて守ろうと努めるならば、そのとき、聖きみたまの勧めにより、あなたたちも私たち同様、人生の重大な局面に際して導きを受けることができるのである。聖きみたまの導きと主の御力により、あなたたちは自分の生命をも救い得るのである。

人はどのようにして聖霊を得、生涯を通じて導きと慰めを受けることができるか

聖霊の絶えざる力

十二使徒評議員会補助

フランクリン・D・リチャーズ

末日聖徒イエス・キリスト教会は、他の教会とはどう異なっているのか、という質問がたびたび投げかけられる。

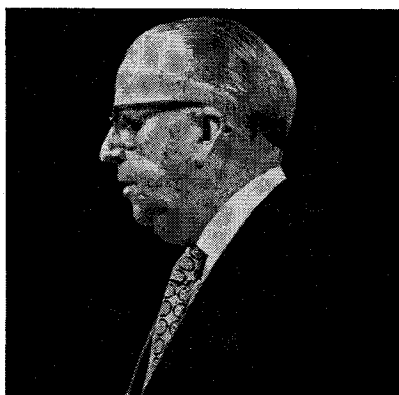
あるとき、予言者ジョセフ・スミスもこれと同じことを尋ねられた。彼の答えはこうであった。最大の相違のひとつは、バプテスマの施し方である。また按手礼によって聖霊の賜を受けることも、また私たちが聖霊の絶えざる力を信じているということも異なっている。(History of the Church「教会歴史」第4巻、P.42参照)

私たちの教会の信仰簡条第1条と第4条には、この信条が簡略に示してある。

「われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」

「われらは、福音の第一原則と儀式とは、第1、主イエス・キリストを信ずる信仰、第2、悔改め、第3、罪の赦しを受けるために水に沈めらるるバプテスマ、第4、聖霊の賜を授かるための按手礼なることを信ず。」

「聖霊は天父と御子を証する御方であり、また助け主であり、教師であり、さらに貴重なみたまの賜を持っておら



れる。」

近代の啓示を通じて、私たちは次のように教えられている。「御父は、人間の有する肉体と同じく触知し得る骨肉の体を有したもう。御子もまた然り。されど、聖霊は骨肉の体を有したまわずして霊の御方なり。もし然らずとせば、聖霊われらの中に住みたもうこと能わじ。」(教義と聖約130:22)

これこそ、当末日聖徒イエス・キリスト教会で教えられているままの、神会に関する、簡潔で美しい概念である。

ユダヤ人の指導者のひとりであるニコデモが、夜イエスのもとに来て、救われるためにはどうしたらよいか尋ねたとき、イエスは答えられた。「だれ

でも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。」(ヨハネ3:5)

また、この神権時代にも、私たちは次のように戒められている。「汝はこの民の中に行き、……この民に言うべし。『……罪を赦さるるために……悔い改めてイエス・キリストの御名によりてバプテスマを受けよ。而して何人にもかくする者は、この教会の長老の按手によりて聖霊の賜を受くべし』と。」(教義と聖約49:11, 13, 14)

この新しく生まれるということは、霊的に生まれ変わることであるという概念を説明するために、救い主は次のように言われた。「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。」(ヨハネ3:6, 7)

主イエス・キリストを信ずる信仰を持ち、悔い改め、そして水によるバプテスマを受けて初めて、聖霊を受けるための必要条件が満たされるのである。

使徒パウロは、コリントの聖徒に送った手紙の中で、次のように述べている。「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、……自分の内に宿って

いる聖霊の宮であ」(Iコリント6:19)り、「もし人が、神の宮を破壊するなら、神はその人を滅ぼすであろう。なぜなら、神の宮は聖なるものであり、そして、あなたがたはその宮なのだからである。」(Iコリント3:17)

私たちは、聖霊の導きを受けて生活するために、あらゆる点で自分の体を清く保たなければならない。

ブリガム・ヤング大管長は、次のように述べている。「聖霊は……人の心に示現を与え、知恵の宝庫のとびらを開く。こうして、人は神のことを理解し始める。…人は自分自身を理解し、どのような大きな目的があつてこの世に存在するのか、理解するのである。」

(Journal of Discourses「説教集」第1巻, P.241)

もし人がこの世の生涯を最大限有効に送りたいと思うなら、この世に存在する目的を知らなければならない。

聖霊の賜は、それを受けるにふさわしい人々に対して、人生の目的は何かすなわち私たちの存在の目的は何かという質問に答える上で、極めて有益な働きをなす。

聖霊の大切な役割りのひとつは、父なる神とその御子イエス・キリストを証することである。使徒パウロは、コリントの聖徒に書き送った手紙の中で次のように言った。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない。」(Iコリント12:3)

神が生きておられ、またイエス・キリストが神の御子であり、私たちの救い主であり、贖い主であることを知ることは、人生の目的を理解する上で、絶対に必要である。

また、聖霊は、天父と御子を証され

ると同時に、助け主でもある。救い主は、十字架にかけられる直前、弟子たちに別の助け主を約束された後、次のように言われた。「……助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわれる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」(ヨハネ14:26)

これまで述べてきたことから、聖霊が天父と御子を証する御方であり、また助け主であり、教師であり、さらに知恵、知識、信仰、識別、指導といった、貴重なみたまの賜を持っておられることがわかる。

確かに、聖霊の祝福は現実のものであり、人生についての理解と認識を深める上で、大いに助けになる。けれども、時にはある点で、私たちの理解の及ばぬこともあるのは事実である。

私は今、ある青年の述べた証を思い起こしている。その青年は、合衆国空軍士官学校に籍を置く士官候補生であった。

青年は、その課程を卒業するのに非常な困難をきたして、失意のどん底にあった。このとき、青年は末日聖徒の士官候補生に会い、彼から、この学校にはかなりの人数の末日聖徒が在学しており、週日の間、毎朝5時に一緒に集まって、福音の勉強会を開いているという話を聞いた。その青年は、勉強会に参加するよう勧められた。

青年は勉強会に参加し、その素晴らしい雰囲気と深く心を打たれた。青年は続けて勉強会に出席し、やがて宣教師から家庭集會を受けた。こうして、研究と祈りと教会への出席を通じて証を得、バプテスマを受けた。

青年は聖霊を受けたとき、その影響

力によって理解の眼が開き、記憶が鮮かによみがえるのを感じることができた。そしてそれ以来、彼は問題もなく良い成績をとることができたと証した。失意は去り、平安と慰めが青年の心に入り込んだ。これこそ、聖霊の偉大な価値に対する、靈感にあふれ、心の暖まる証であった。



ある晩、「起きて、階下に降りてみなさい」とはっきり告げる声を聞いて目をさましたその年若い父親は、火を消し、自分の家族の命を救うことができた。

同様に、私自身も、これまで幾度となく聖霊の導きを感じてきた。この聖霊のささやきに従った結果、家族も私もこれまで豊かに祝福を受けてきた。

子供たちがまだ小さい頃、私たちはソルトレーク・シティに住んでいた。そのとき、ワシントンD.C.で合衆国政府の仕事をするよう要請を受けた。これは私たちの家族にとって、大きな

決断のときであった。充分に心を込め、祈りの気持で考えた末、私たちはこの要請を受けることにした。この決断を下した後、心の安らぐ思いがしたが、その靈感に従うためには、かなりの勇気が必要としたのであった。

数年後、私が政府の仕事から身を引くときも、決断の迫られたときであった。ある会社の出してくれた良い雇用条件を受けようか、それとも自分で事業を始めようかと、決断に迫られたのである。色々の圧力があり、種々考慮したが、充分な熟考の末、私は自分で事業を始める決心を固めた。私は熱心に祈った後、これこそ私のとるべき道であるということを強く感じた。私はみたまのささやきに従うことができるよう、勇気を求めて祈った。

確かに、あなたたちの多くが、大切な決断に迫られたとき、主の導きを求めたことを証することができるであろう。そしてまた、その導きを受けたことも証できるであろう。

同様に、みたまの力の現われは、人生のいたるところで見出される。

私たちは、迫り来る危険についての警告を与えられたという立派な会員たちの証を何度も耳にしている。

ある年若い父親は、彼とその家族に与えられた偉大な祝福について、私にその証を話してくれた。ある晩彼は、「起きて、階下に降りてみなさい」というはっきりした声を聞いて、目をさました。その警告に従って、一階の台所へ行ってみると、壁が火に包まれていた。彼は急いで家族を起こすと、消防署へ電話し、家族と共に消火活動に努めた。こうして、消防車が来る前に火を消すことができたのである。

この父親は、この警告が聖霊による

守護の現われであったことを少しも疑わなかった。これは、みたまを受けるにふさわしい生活を送っている人々が受けることのできる守りなのである。

救い主は再三、正しい生活を送っている会員には、病いや死に直面したとき、聖霊が慰め主になるであろう、と約束しておられる。

悲しんでいるときに慰めのみたまが宿り、平安と理解を求める上で大きな助けになったと証を述べている人々は数多くいる。

数週間前、私はふたりの素晴らしい婦人に会う機会があった。ふたりは互いに親しい友人同士であり、共に悲惨な飛行機事故で夫をなくしたばかりであった。私がふたりに会ったとき、ふたりはひどく絶望し、力を落としていたのだろうか。いや、全くそんなことはなかった。私は、これまで見たことのない勇氣と強さを目にしたのである。ふたりは共に、みたまの慰めをはっきりと感ずることができたこと、夫が天に召されたのには何か目的があることそして、常に教会の教えを守って生活し、主の戒め通りの生活を送るなら、自分たちや家族のことも含め何もかもうまく行くという確信を得たこと、などを証してくれた。

私には、静かな細い声、すなわちみたまのささやきを聞いた経験がある。あなたたち兄弟姉妹に助言を与えたとき、人を神権の職に聖任したとき、人を教会の役職に任命したとき、病いの人に祝福を与えたとき、教会員にも非教会員にも私の証を述べたとき、説教をしていたとき、またその他様々なときに、私はみたまのささやきを聞いた。

しばらく前、ある若い婦人から尋ねられたことがあった。「あなたは、自

分が聖霊の力を受けて話していることが、どうしてわかるのですか」と。そこで「私は、それを霊的にも肉体的にも感ずることができるのです」と答えた。

私はあなたたちに、聖霊が私に与えて下さった証を述べたいと思う。神は生きておられ、私たちの霊の父であられる。また、イエスはキリストであり私たちの贖い主、救い主である。ジョセフ・スミスは、昔も今も偉大な予言者であり、彼を通して完全な福音が回復され、イエス・キリストの教会が再建され、そして神の御名によって行なう権能が地上に回復された。さらに聖霊は、ハロルド・B・リー大管長が偉大な近代の予言者であり、この地上におけるキリストの教会の頭の地位にしているということを、私に何度も証して下さった。私は、私たちひとりびとりが主と共に、このリー大管長をあらゆる点で支持するよう祈ってやまない。私は、自分の生涯において、聖霊の力が絶えずあったことをこの上なく感謝している。

私はあなたたちに証を述べたいと思う。人が回復されたイエス・キリストの福音を受け入れ、その原則と儀式に従うならば、聖霊は間違いなく、生涯にわたって、導きと慰めを与えて下さるであろう。

確かに、末日聖徒イエス・キリスト教会と他の教会との大きな相違のひとつは、忠実な会員たちが絶えず聖霊の力と賜を享受できるという点にある。願わくは、私たち皆がこれらの賜を求め、そしてそれを受けるにふさわしくなれるよう、イエス・キリストの御名によって祈る。アーメン。

救い主の恵みは代々の人々に及ぶ

その場にいるがごとくに

七十人最高評議員会会員

S・デルワース・ヤング

主イエス・キリストについてお話するのが私の目的である。

私は主がこの末日において教会を建てられたことを知っている。それ故に私は地上の主の王国につける祝福にあずかることができ、また私が忠実であるならば、この世での仕事を終えると主の御前に行き、永遠の喜びを受け継ぐことができる。私はこのことを心の奥底からはっきりと知っている。主はそれを私だけの特権とはされなかった。限りない愛を持ちたもう主は、私の家族全員、あなたがたの家族全員、親族全員、地上のあらゆる人々に手を差し伸べておられる。

私は、主がもし御姿を私に示されなかったら、主の本当の姿を知ることができないことを承知している。幕を貫いて主の御姿を拝見し、知識を得ること、それは実に大いなる願望である。しかし主は予言者という聖い人々に御自身について語られ、見聞きしたことを記録せよと命じられたので、私は幾分かを知っている。私は聖典から主について読むことにより、聖霊の力を受けて主の声を聞くことができる。すなわち、主の御言葉を読むことは主の御声を聞くことである。

主は予言者ジョセフ・スミスを通じて将来の使徒たちに言われた。「これらの言は世の人々より出でしにもあらずまた人間の言にもあらず、われより出でし言なり。……この言を汝らに語れ



るはわが声なり。そはわが『みたま』によりて汝らに与えられ、わが能力によりて互いにこれを読むを得るなり。……（「これを読む」と言われたことに注目）これを以て、汝らわが声を聞きわが言を知るを証するを得べし。」（教義と聖約18：34—36）

すべてのものがこれによってでき、できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった、このことから、話を始めよう。（ヨハネ1：3参照）このヨハネの言う「言」という存在が肉体となり、私たちのうちに宿ったこと（ヨハネ1：14参照）、そしてそれが肉における独り子主イエス・キリストであることは明白である。

また、神のすべての子供たちが試しを受けるために地上へ下り、この御子が提案された救いと昇栄の原則に従うかどうかを試されるべく、霊として組

織されたことも承知のことである。霊たちはこのように告げられた。「われら降り行かん。……これらの者の住まうべき地を造らん。而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」（アブラハム3：24、25）それから時が至り主御自身が人の光、命として地上に下られた。（ヨハネ1：4参照）

私はこのことを心の限りを尽くして信じながら、この偉大なメシヤの地上の生涯について読むのである。主の誕生のとき、天の軍勢が喜びの賛歌を歌い、羊飼いたちがそれを聞いた。なぜ出立したのかは説明されていないが、東方から博士たちが来て、ヨセフとマリヤに黄金と乳香と没薬の高価な贈り物をした。博士たちが靈感を受けて主を捜しあて、家族を養うことができるだけの高価な贈り物をしようという気持になったことを、私は信じて疑わない。

私はヨルダン川の出来事を読むたびに胸が躍る。まだ世に知られず注目されていない神の御子がやって来ると、みたまによって主を見分けたバプテスマのヨハネがやむにやまれず叫ぶのである。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」（ヨハネ1：29）「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」（マタイ3：17）バプテスマの後で、御子を証する天からの声を聞

いたときのヨハネの心境はどのようなものであったか、想像できるだろうか。

それから後の主の生涯をたどると、主が、その時はまだ使徒になること、特別の証人となることの意味をはっきりとは知らなかった3人の漁師と共に、あの山に登られたことは実に重要であると感じるのである。そこで主の栄光が彼らの前に示され、目が開けてモーセとエライジャを見、ヨハネが聞いたと同じおごそかな証を聞いた。ただこのとき声は、間近に広がる輝く雲の中から聞こえた。私は心の中に、雲の中

「主の生涯には、……たとえようのない喜びを感じる多くの出来事がある。また、主の犠牲と苦悩に頭の下がる出来事がある。」

からのおごそかな言葉を聞く思いがする。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け。」(マタイ17:5)

主の生涯には、読みながらたとえようのない喜びを感じる多くの出来事がある。また、主の犠牲と苦悩に頭の下がる出来事がある。

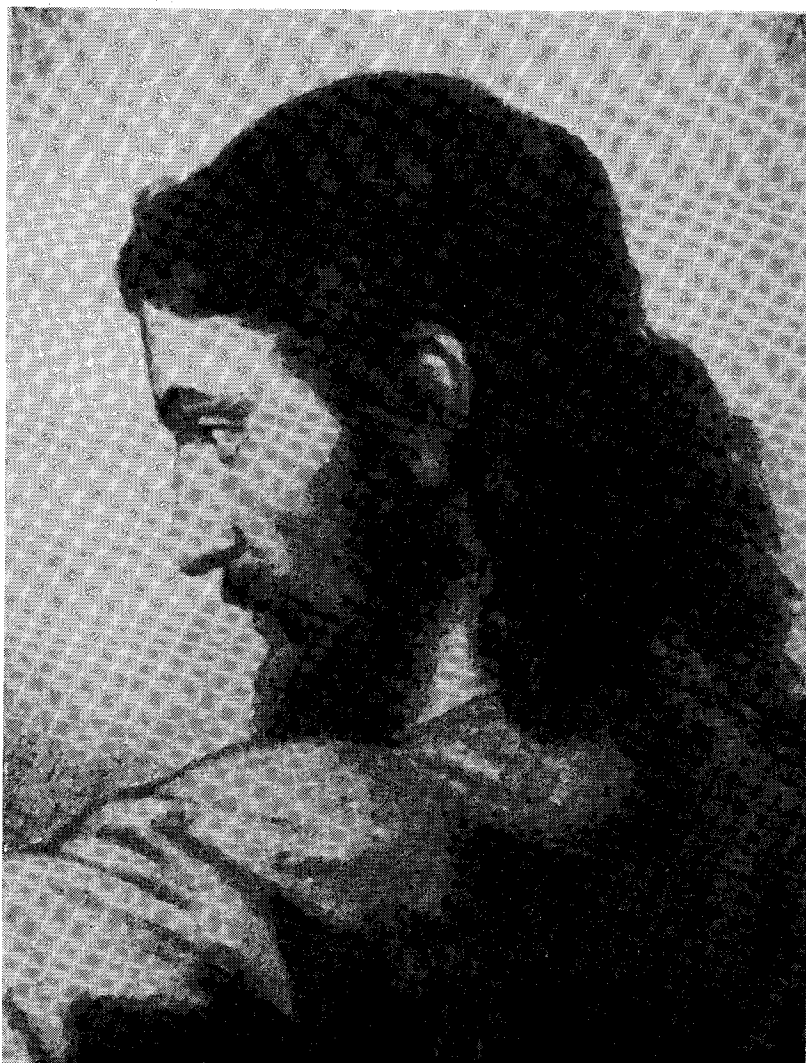
私たちの多くは肉体的苦痛がどのようなものであるかを体験によって知っており、また友人や愛する人々が悲しんだり悩んだりすると、精神的な苦しみを感じる。私はこの偉大な長子である神の御子が世の罪のためにいかに苦しめたかを完全に理解することができない。私たちはそれをゲッセマネ(精神的霊的な大苦難の経験という意味)と呼ぶ。主は大なり小なりだれでも罪を犯すことを知りつつ私たちに自由意志を与え私たちが悔い改めて主と主の教えに従うならば罪を贖おうと、その代価を払う責任を自ら引き受けて下さった。私は主がせよと言われたことを行なうことに平安を見出す。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平

安をあなたがたに与える。……」(ヨハネ14:27)これはまさにそのことである。私はいつかもっと深く理解できるようになることを願っている。私は主の律法を守り、戒めの内に生活するときに得られる平安を知っている。

主が十字架にかけられたことを読むとき、私は自分の手足を見つめ、暑い日

中に十字架につけられて体の重みで釘のさし口が裂け、苦痛に全神経、全筋肉がゆがむさまを想像しようとする。その苦痛には、すべてが終った(ヨハネ19:30)と言って息をひきとられるまで、寸時の休みも逃避もなかった。苦しみを私のため、あなたがたのために耐えられたことを考えると、私の頭は垂

「承認と紹介のあの言葉を聞くとき、私の心は確信の歌声をあげる。『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。』」



れ、こぼれる涙を禁じ得ない。それは1900年を経た今もなお、昨日のこのように胸を刺される出来事である。

さらに読み進むと、福音書のそれぞれが勝利の言葉に終わっていることに気がつく。主はよみがえられた！主こそ王の王であると。主は「靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君」ととなえられる方である。（イザヤ9：6）予言で与えられたこれらの称号のひとつひとつを考えると、私はそれぞれの意味の深さに驚くのである。

主が雲に囲まれて見えなくなったとき、11人の使徒は何を考えたであろうか。私にはその姿が想像できる。ケドロン川を渡り、細い通りを通っていつもの集会所に向かう途中、理解が深まると共に彼らの恐れと個人的な望みは薄らいでいった。主の約束が実現して聖霊のみたまが豊かに注がれたペンテコステの日の不思議な出来事を、私は感謝に満たされて読むのである。

私は1700年近くもの霊の暗黒時代、こんなにも長期間霊のともしびがなかったことをどうしたことかと考えあぐむ。そして近年発見されたモルモン経という変わった名前の聖典から、アメリカの民に主が現われたこと、ユダヤ人を祖先とする民のこと、そしてイスラエルに住む彼らの血族のことを知る。また、主が天から下りて来られたこと、大勢のニーファイ人が神殿のまわりに集まっていて、天から心の底までつき通すような声が聞こえたことを読む。

主がパレスチナにおられた間に2回聞こえた承認と紹介のあの言葉を、さらに言葉をつけ加えてもう一度この身に聞くと、私の心は確信の歌声をあげる。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」（Ⅲニーファイ11：7）雲の中から聞こえた天父の御声は、今再び神の御子を証した。私

はこの言葉が真実であることをはっきり知っている。

私はこの偉大な御方が霊における御父の長子として、いかにこの世の生涯を生きたかをすでに読んで知っている。肉体を受けていない霊としてジェレドの兄弟に姿を現わされたこと（イテル3：6—13参照）を知っても、強く心を動かされはするが驚きはしない。ジェレドの兄弟が主の指を見て、それが人の指のようだと知ったときの恐れが、私にもわかるような気がする。この予言者はそれに驚いた。しかし私は驚かない。なぜなら私は、主が「聖なる人」と呼ばれる神の長子であることをすでに知っているからである。そのため、主がこの偉大な予言者に姿全体を示されたことに私は驚かない。ただ畏怖するだけである。聖典を読めば読むほど、学べば学ぶほど、それが真実であるとさらに知るのである。

そして最後に、近代のこの神権時代の偉大な示現のことを読む。キリストのパパテスマの際に、また山上において、そしてニーファイ人に対し、（これはわたしの愛する子であると）証をされた天父は、このとき、私の知っている限りで初めて雲から姿を現わして語られた。御父は御子と共に威風あたりを払う神聖な光の中に立ち、ジョセフ・スミスに「こはわが愛子なり、彼に聞け」（ジョセフ・スミス2：17）と言われた。それを読むと、私はジョセフ・スミスと同様に、神がおられ、神が実際に私の父であることをはっきりと知るのである。この御方は偉大なエローヒム、万人の父である。そしてそのかわりに立つのは、再び御父が証した御子イエス・キリストである。

御父が同じ紹介をされたのは、符合させるためではない。少年ジョセフ・スミスが真理を証するには、まず真理を知らなければならなかった。それは153年前にあの森で彼に啓示されたの

である。私は真理のみたまによって、その示現が真実であることを知っている。

1700年の間、人々はキリストを代表すると主張してきた。しかしキリストを告げ知らせる者、キリストを証する声を聞いた者はひとりもいなかった。1700年間、自分の主張を正当だてたためこのような証明をすることを想像した者はなく、あえてそれを真似ようとする者もなかった。だがこのときは違っていた。1820年春のある朝、永遠の真理が再び啓示されたのである。諸天が開かれて父なる神と御子が共に現われ、御父が2千年近い昔に3度言われたと全く同じ言葉で御子を証されたことを。心に聖霊の宿る者ならばひとりといえども疑うことのできない威勢と方法によって。

少年は詐欺行為ができる年ではなかった。あの聖なる言葉は永遠の御父の口ずから出たものである。これは私の証である。世に叫ぶ私たちの証である。今現在、私たちは愛する御子を告げ知らせ、御子を礼拝し、ほめたたえ、誉れと栄光とを捧げるのである。きょう私たちは主をたたえて主の民の大会に集まっている。

私たちは、主が戻って1千年の統治に就かれるときを待ち望んでいる。霊とまことをもって主を礼拝しようではないか。現在油注がれた予言者を、主の代弁者を、そして彼を助ける人々を、忠誠を尽くして支持しようではないか。ハロルド・B・リー大管長がその予言者である。彼は、1829年に天使がジョセフ・スミスに与えたと同じ鍵を持っている。聖霊に促されて語る彼の言葉は、今の世に与えられる啓示である。これがあなたがたと世の人々に伝える私の証である。イエス・キリストの御名により、アーメン。

あなたにとって信仰とは

信仰の実践

十二使徒評議員会補助

O・レスリー・ストーン

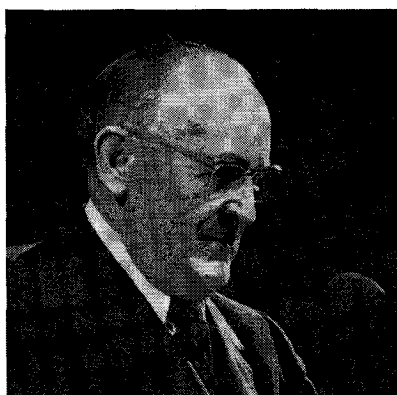
使徒パウロは私たちに語っている。

「……信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである。」(ヘブル11:1) 信仰と信念は同じ意味に用いられているため、両者を区別するのが難しいことがしばしばである。しかしそこにはある違いが存在する。

私たちは信念を持つことなしに信仰を持つことはできないが、信仰を持たずに信念を持つことはできる。信念は信仰の基礎である。信仰とは、私たちの主、救い主イエス・キリストに対する信頼である。

聖典には、信仰を行使して戒めに従う者の救いについて多くの確証がある。そのひとつがマルコ伝16章16節である。そこにはこう記されている。「信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。」主が「信じてバプテスマを受ける者は救われる」と言われたことに注意していただきたい。それはすなわち、私たちは信じる以上のことをしなくてはならない、行動しなくてはならないということである。信仰とは、行動に駆りたてる力である。

ヤコブ書2章20節には、「ああ、愚かな人よ。行いを伴わない信仰のむな



しいことを知りたいのか」とある。

多くの者は神が備えたもうと信じているが、私たちはただ怠惰な気持ちで座っていたのでは結果は期待できない。主は私たちに、自分の求めるもののために努力することを要求しておられる。私たちが自分の分を尽くして信仰を実践したときに、義しい行ないのすべてに対して主の助けがあるという約束を自分の身に受けるのである。だかも私たちが自分の分を果たさなければ、どうして天父の助けが期待できるだろうか。故デビッド・O・マッケイ大管長は、「たゆまず努力する人にも豊かな報いがもたらされる」と語った。それは、信仰を持つだけでなく、目標を遂げようと進んで努力し、犠牲を払う人たちだけに、その報いがある

ということである。

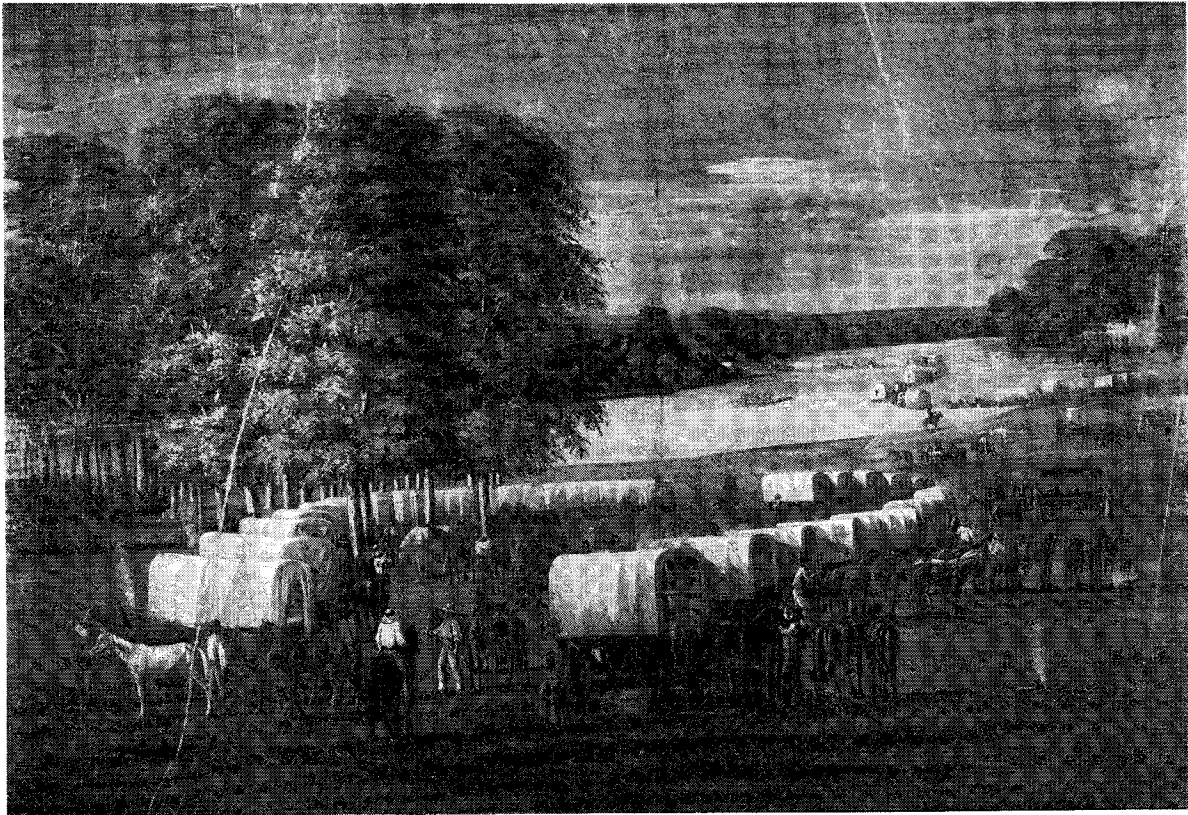
「どうしたら信仰が得られるだろうか」と問う人がある。その答えは、他の犠牲を身につけるとときと全く同じだということである。私たちはまず基礎を築き、それから自分の思いと行ないを育てていくのである。

ジョセフ・スミスはこのように言った。「信仰は神のみ言葉を聞くことにより、神のしもべの証によってもたらされる。……」(Documentary History of the Church 「教会歴史記録」第2巻〔英文〕P.379)

私は、この声を耳にするすべての人々に証申し上げる。長年にわたって総大会に出席し、ここやその他の場所で私たちの指導者の証を聞くことにより、絶えず私の信仰は増し、イエス・キリストの福音が真実であることの証が強められてきたことを。

権能を持つ人が執行する聖餐式にあずかることは、信仰を養う上で大きな助けとなる。裂かれたパンは贖い主の裂かれた体を象徴し、聖なるカップの水は贖いの血を表わす。聖典を読むことで信仰は養われる。信仰を強めるには熱心な祈りが不可欠である。祈りは信仰の言葉である。

信仰を養うもののうちで最大のもの



「末日聖徒の開拓者は、荒野横断のときに
偉大な信仰を見せてくれた。」

は、正しい生活をするのである。信仰を打ち砕くもののうちで最大のものは、罪である。小さな罪ですら信仰を失わせる。虚栄や高慢や利己主義、欲、憎しみが、信仰を養い生かす神の聖きみたまを退ける。

信仰に生きるという明るい光を求めてたゆまぬ努力を続けるならば、心は清められ、意志は強固に、人格は本物になる。

高邁な考えと祈りと献身と正しい行ないによって自分の信仰を常に実践することは、運動が体の健康に大事なものと同様に、霊の健康にとって欠くことのできないものである。他の貴重な物事と同じく、信仰もいったん失われたならば、取り戻すことは難しい。信仰

を守り通すには、永遠にわたって寝ずの番が必要である。信仰を持ち続けるために、私たちは福音の原則と儀式に一致した生活をして、天父との調和をはからなくてはならない。

モーセは信仰を行使して、イスラエルの民を束縛から解放した。主がモーセになすべきことを教え、モーセはそれが実現できるという信仰を持った。彼はイスラエル人を集めて旅に出た。彼らを阻止しようとしてすぐ後をエジプト人が迫ったことを、思い出されるであろう。

イスラエル人は紅海まで逃れて、もはやこれまでと観念した。前には海、後ろにはエジプト人と、はさみうちになったのである。ある者はこうつぶや

いた。「……荒野で死ぬよりもエジプトびとに仕える方が、わたしたちにはよかったのです。」

しかしモーセは言った。「あなたがたは恐れてはならない。……主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい。」

主はモーセに言われた。「……あなたはつえを上げ、手を海の上にさし伸べてそれを分け、イスラエルの人々に海の中のかわいた地を行かせなさい。

モーセが手を海の上にさし伸べたので、主は夜もすがら強い東風をもって海を退かせ、海を陸地とされ、水は分れた。イスラエルの人々は海の中のかわいた地を行ったが、水は彼らの右と左に、かきとなった。エジプトびとは

追ってきて、パロのすべての馬と戦車と騎兵とは、彼らのあとについて海の中にはいった。」(出エジプト14:12—14, 16, 21—23)

「他の人の証を主な拠り所として信じる事が求められるとき、人は真理の糸をしっかり握って自分の信仰を育てていかなければならなくなる。」

それから主はモーセに、手をさし伸べて水を戻らせ、エジプト人をおぼれさせよと言われた。モーセは再び神への信仰を行使して、エジプト人は残らず水の中に消えた。

予言者ジョセフはその生涯の働きを通じて大きな信仰を示した。彼は14歳のときに、聖書を読んでいてヤコブの手紙第1章の5, 6節に心を留めた。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。ただ、疑われないで、信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。」

この聖句はジョセフの心を動かした。彼はもしだれかなすべきことを決める知恵を必要な者がいるとすれば、それは自分であると感じたのである。

ジョセフは信じ、信仰を持った。その信仰は行動を起こさせ、彼は森に行き祈った。祈りは答えられた。

もし予言者ジョセフの強い信仰がなかったとしたら、私たちの生活はどれほど違っていただろうか。

ブリガム・ヤングは大きな信仰の持

ち主であった。彼は生ける神を信じていた。予言者ジョセフの教える啓示された原則と教義をすべて信じていた。また自分をも信じる人であった。

ブリガム・ヤングはあるときこのように言った。

「もし末日聖徒が己の特権にふさわしく生活し、イエス・キリストの御名によって信仰を行使し、日毎たえず聖書の全き喜びを享受して生きたならば、地の面には彼らの乞い願うもの、彼らに与えられないものは、何ひとつないのである。」(Journal of Discourse「説教書」第11巻〔英文〕P.114)

末日聖徒の開拓者は、荒野横断のときに偉大な信仰を見せてくれた。彼らは家や財産のほとんどを残して旅立った。ある者は家族や友を置いて、教会指導者に従い、未知の土地を目指した。その理由は明白である。彼らには大きな信仰があった。彼らは信仰を行使して、平和に礼拝し主に仕えることのできる場所を求め、そして見出したのである。

時々私たちは世の人の改宗の遅さにじれったくなる。もどかしがって、どうして神が主権と栄光をもって姿を現わし、全地の民がすぐさまひざまずいて神を礼拝するようにされないのだろうかと考えたりする。しかしこのことをよく考えるとき、ゆっくりと気長に世の人を改宗させる神の計画が最良であることを、私たちは理解するのである。他の人の証を主な拠り所として信じる事が求められるとき、人は真理の糸をしっかり握って自分の信仰を育てていかなければならない。この神の計画によれば、私たちは自分で信仰を養い、耕し、広げていかなければなら

ないのである。気長に信仰を増してい

「……信仰を常に実践することは、運動が体の健康に大事な のと同様に、霊の健康にとって欠くことのできないものである。」

く長い間に、私たちは忍耐と強い人格を身につける。その貴重な性質は永遠の価値を持つのである。

私たちの生活に、教会の歴史に、そして国家の歴史に、今日ほど信仰の必要な時代はかつてなかった。

私たちには回復されたイエス・キリストの福音を信じる信仰と、教会指導者への信頼と、自分に対する信頼が必要である。

私はイエス・キリストの福音が真実であることについて証を述べて、話を終わりたい。私の家族が最大の祝福を受けたのは、時間や手段や努力を自由に使って教会の責任を遂行したときであった。その祝福は、信仰を持ち、イエス・キリストの福音を受け入れ、教えに従って生活しさえすればだれにも与えられる。

私たちひとりびとりが日に日に信仰を強め戒めを守り、予言者ハロルド・B・リー大管長と彼と共に神の王国を建設するすべての人々を愛し、敬い、支持するように、また私たちが終りまで忠実に生き、あらゆる祝福のうちで最大のもの、すなわち、救いであり昇栄である天父の王国における永遠の生命の祝福を得ることができるように、これが私の心からの祈りである。

イエス・キリストの御名により、アーメン。

悔い改め、困っている人々を助け、信仰を持ち、そして愛し合いなさい

汝ら聖なる所に立つべし

大管長 ハロルド・B・リー



私は、この教会の仕事のために主御自身が選ばれた偉大な人々のことを考えるとき、自分の心が喜びに満たされるのを感じず。この偉大な人々とは、教会幹部の方々のことであり、また十二使徒評議員会地区代表、十二使徒評議員及び七十人最高評議員会伝道部代表を務めて下さっている方々のことであり、さらに、様々な組織で働いて下さっている人々のことである。その重要な地位に召された人々のことを考えてみると、まるで奇跡とでも言わんばかりの方法で、必要な人が、必要な時に、必要な所を与えられてきており、全くこれには驚きを禁じ得ない。

私は、幹部の兄弟たちの説教を聞いて、予言者アルマによって与えられたひとつの教えのことを思い起こしていた。改宗したばかりの人々が、モルモンの泉のかたわらでバプテスマを待っていたときのことである。アルマは、バプテスマを受ける者として結ぶ誓約がどのようなものであるか説明して、次のように言った。

「……あなたたちは神の羊の群に入って神の民と言われること、互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと、

悲しむ者を思いやって共に悲しむこと、慰めが要る者を慰めること、また……いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、……神の証し人になりたいと心から思っている。

従って、あなたたちがもしも真心からこれを望んでいるならば、あなたたちは主からますます豊にその『みたま』を賜うよう、主に仕えてその命令を守るという誓約を主に立てた証拠として、主の御名によってバプテスマを受けるのに何のさしつかえがあろうか。」(モーサヤ18：8-10)

私は、あなたたちに、この誓約の条件のひとつである「互いに苦難を軽くするために喜んで助け合うこと」という点を注目していただきたいと思う。もし私が、「この世で人が背負わなければならない最大の苦難とは何だろうか」と尋ねたら、あなたたちは何と答えるだろうか。人がこの世で背負わなければならない最大の苦難、すなわち重荷とは、罪の重荷である。一体、この罪の重荷を軽くするためには、どのように助け合ったらよいのだろうか。「数年前、ロムニー副管長と私がオフィスにいたときのことである。ドアが

開いて、ひとりの立派な青年が入ってきた。しかし、その青年の表情にはありありと苦難の色がうかがえた。青年は言った。「リー長老、ロムニー長老。私は明日初めて神殿に入ります。私は過去にある過ちを犯しました。私は監督の所へ行き、そしてステーク部長の所へ行き、その罪を皆完全に告白しました。そして、私が悔い改めて二度とそのような過ちを犯さずにある期間経ったので、監督とステーク部長は、神殿に入る準備ができたと判断して下さいました。でも、それで充分とは言えないのです。私は知りたいんです。どうしたら主も私を赦して下さいったということを知ることができますか。」

そのような質問をして来る人に、あなたたちならどう答えるだろうか。私たちはしばらく深く考えて、モーサヤ書にあるベンジャミン王の説教のことを思い出した。この箇所では、バプテスマを求める群衆のことが書かれている。群衆は、自分たちが肉の欲に支配されている有様をかえりみて、次のように言った。

「かれらは、……声をそろえて高く叫んで言った『ああ憐みたまえ。キリストの血による身代りの贖罪の効力を及ぼして、われらが各々その罪を赦されて心を清められるようになしたまえ。……』

それから後、かれらは……もはやその罪の赦しを受けて良心が安らかになったから、主の『みたま』がかれらに

下ってその心が喜びに満たされた。」

(モーサヤ4:2, 3)

ここに答えがあった。

自分が何者であろうと、どこにしようとか関係なく、罪を悔い改めるために自分のできることはすべて行ない、能力の限りを尽くして償いと回復をしたなら、また、その罪が教会員としての資格に影響を与えるものである場合に、しかるべき権能を持つ人の所へ行った

「今、ここで私はあなたたちに申し上げる。私は、心の中に一点の疑いもなく、この教会を管理しておられる御方が実在する御方であることを知っている。その御方は、私たちの主、イエス・キリストである。」

なら、そのときには、主が自分を受け入れて下さったのかどうか知りたいと心から願うことであろう。もし心の奥底から良心の安らぎを求め、見出すなら、そのしるしによって、主が悔改めを受け入れて下さったことを知ることができるのである。しかし、サタンは別の考え方を抱かせようとするのであろう。しかも時には、すでに一度過ちを犯したのだからもとに戻ることはない。だからどんどん罪を犯し続けた方がいい、とそそのかすかも知れない。これは大きな間違いである。赦しの奇跡は、悪い行ないを捨て去って、二度と同じ過ちを犯さない人々には皆与えられるものである。それは、主が今日私たちに与えられた啓示で次のように言っておられるからである。「…汝ら往きて今より罪を犯すなかれ、罪を犯す者（再び罪を犯すの意）には前の罪彼に返るべしと主なる汝らの神言う。」（教義と聖約82:7）罪の重荷のために苦しんでいる人がいたら、そのような人は皆、この聖句を心に留めておいていただきたい。

また、教師である人々に申し上げる。そのような罪の重荷を負っている人々から、また良心の苛責に耐えかね

て動きのとれなくなっている人々からその重荷を取り除くために、彼らに手を差し伸べていただきたい。そのような人々は、自分がどこへ行ったら答えを見つけ出すことができるのか、知らずにいるのである。悔い改めて、完全に償いができるまで助けて下されば、彼らもまた、良心の安らぎを得、主がその悔改めを受け入れて下さったことを主のみたまによって確信することができる。

幹部の兄弟たちの説教を通じ、助けを必要としている人々を助けなさいという偉大な呼びかけがあった。それは物質的な助けばかりでなく、霊的な助けについても言える。今日、私が目にする最大の奇跡は、必ずしも病める肉体の癒しではない。むしろ、私が目にする最大の奇跡は、病める人、すなわち心に病いを持ち、落胆して取り乱し正に精神的に挫折する一歩手前にいる人々の癒しである。私たちはそのような人々にもすべて、援助の手を差し伸べている。それは、そのような人々も主の目には大いなる者だからであり、まただれひとりとして、自分は忘られているのだと感ずることがないよう私たちも望んでいるからである。

しばしの間、数年前の私の身の上に起きた出来事についての話を聞いていただきたいと思う。その頃、私は潰瘍を病んでいて、それは日増しに悪化していた。私たちはそのとき伝道部を視察中であったが、ある日の朝、妻のジョーンも私も、できるだけ早く家へ帰るようという靈感を受けた。そのため、計画していた様々な集会を変更して、家へ帰ることにした。

その帰途、私たちが飛行機の前部座席に座っていたときのことである。何人かの教会員が次のセクションに座っていた。ところがある所まで来ると、だれかが私の頭の上に手を按くのである。そこで私は顔を上げて見たが、そこにはだれもいなかった。家に着く前に、また同じことが起こり、再び同じ

経験をした。それが一体だれであったのか、また何によったのか、私にはわからなかった。しかし数時間後、私は自分がそのとき祝福を受けていたことを、しかも最も必要とする祝福を受けていたことを知ったのである。

家に着くとすぐに、妻は非常に心配して医者へ電話をかけてくれた。すでに夜の11時頃であった。医者が私に電話口に出てくれと言ったので出てみると、気分はどうか、と尋ねてきた。私は「ひどく疲れている。でも、大丈夫だと思う」と答えておいた。ところがその直後、私は大量の血を吐いた。もしそれが飛行中に起こっていたら、私は今日、こうしてここに立ち、この話をすることはなかったであろう。

私は、他に助けを得るすべのないときには、必ず神からの御力がいただけることを知っている。

私は、今自分に与えられている責任の圧倒的な重さをひしひしと感じている。もし私がただ座って、その重荷について思いめぐらしているだけであつたら、私はとうの昔に、すさんだ気持

「赦しの奇跡は、悪い行ないを捨て去って、二度と同じ過ちを犯さない人々には皆与えられるものである。」

になり、その重荷に耐えかねていたことであろう。しかし私はみたまの導きを受けて、N・エルドン・タナー副管長とマリオン・G・ロムニー副管長のふたりの気高い方々を指名することができたのである。あなたたちはきょうこの方々の力強い教えと証を聞いたことであろう。私はこのふたりの方々を指名したとき、自分の責任が、自分ひとりだけで数々の責任を果たすことにあるのではないことを認識した。さらに、私たちは毎週神殿で集会を持つが私が一通り部屋を見渡すと、12人の忠実な人々の姿が私の目に映る。この人々は、世から選び出されて聖なる使徒職の権能を与えられている人々であつ

て、私はこの人々以上に偉大な人を知らない。

偉大な指導者であるあなたがた、ステーキ部長会、伝道部長会、監督会、神権定員会の指導者、また世界の各地で私たちのために祈って下さっているすべての信仰深い聖徒の皆様、私たちも神殿の聖壇にひざまずくたびに、私たちのために祈って下さっているあなたがたすべてのために、心からの祈りをささげていることを知っていただきたい。私たちは、あなたがたにどれほど感謝していることか。

「もし心の奥底から良心の安らぎを求め、見出すなら、そのしるしによって、主が悔改めを受け入れて下さったことを知ることができるのである。」

この大会の終りにあたり、もうひとつの出来事をお話したいと思う。ただし残念ながら、種々の制約があってその一部だけしかお話することができない。

ロサンゼルス神殿が献堂される少し前のことであった。私たちは皆、その素晴らしい献堂式のために、色々な準備をしていた。その出来事は、どちらかという、私の生涯では新しい経験であった。明け方の3時か4時頃のことであったと思う。私はひとつの素晴らしい経験をした。私はそのとき夢を見ていたのではない。確かにそれは示現であった。その示現の中で、私は数多くの霊たちが一堂に会しているのを目撃した。そこでは数多くの男女が立ち上がり、一度に2、3人ずつ、種々の異言で語っていた。それは、並み並みならぬ光景であった。私は、そのときデビッド・O・マッケイ大管長が次のように言う声を聞いたような気がした。「もし神を愛したいと望むなら、人々を愛し、人々に仕えるようにしなければならない。これが、神に対する愛を示す方法である。」その他にも、この示現の中でたくさんのことを見聞

きした。

今、ここで私はあなたたちに申し上げる。私は心の中に一点の疑いもなく、この教会を管理しておられる御方が実在する御方であることを知っている。その御方は、私たちの主、イエス・キリストである。私はイエスが実在しておられることを知っている。また主が私たちの考えている以上に、私たちの近くにおられることも知っている。ばく然とした御父や主がおられるのではない。天父と主は、常に私たちに関心を払い、私たちを救い主の再降臨に備えさせようと種々助けを与えて下さっている。様々なしるしがいいよ明らかなになってきている現在、主の再降臨は、それほど遠い将来のことではない。

あなたたちがしなければならないことは、聖典を読むことである。とりわけ、高価なる真珠のジョセフ・スミスの著の中にある、マタイ伝第24章の靈感訳の部分を読むことである。この中で主は弟子たちに、聖なる場所に立って、動くなと言われている。それは、主が速やかに降臨されるし、だれもその日その時を知らないからである。これこそ準備なのである。

家庭の夕べを通して、家族に教えなさい。家族に神の戒めを守るように教えなさい。神の戒めを守って初めて、この時代で安心して生活してゆけるからである。もしこのように生活するならば、全能の神の力が、まさに天から下る露のごとくに家族に下り、また聖霊が伴うであろう。聖霊は私たちの導き手となることができ、そのみたまが私たちを教え、主の聖なる宮居まで私たちを導いて下さるのである。

何とぞ、主の助けがあって、私たちが自分の職務を理解し、行ない、そして完成させることができるよう、また義のうちに主の御業を進める方法を知っていながらそれを行なわなかったということで裁きの日に足りない点を明らかにされることのないよう、切に祈っている。これらのことを、心からへ

りくだって主イエス・キリストの御名により申し上げる。アーメン



私たちは、「苦難を軽くするために喜んで助け合わなければならない。

中国東

住吉正博
中国東地方部長

四国

長浜修
四国地方部長



「神様が私たちの地方部をいつも祝福し、導いて下さっていますことを、はっきり知ることができますので、感謝しています。」

中国東地方部は、岡山県、鳥取県、兵庫県の三県に及ぶ地方部です。この中に、岡山支部、姫路支部と共に、約1年前に独立した明石支部、倉敷支部の4つの独立支部があります。加えて現在は、加古川市、鳥取市、米子市にそれぞれ付属支部や伝道所が設けられ、この地区の大多数の方々に神様の言葉が伝えられる準備ができました。

この地方部はまだ2年に満たない若い地方部ですが、各支部の兄弟姉妹の頑張りによって神様の御業が進められています。近い将来にこの地区で福音の完全なプログラムが行われるようになるでしょう。

神様は生きてまします。私たち兄弟姉妹のいや全人類のお父さまです。そして肉身の父や母が子供のことを心配すると同じように、いやそれ以上に私たちのことに心を配り、悩み気をつけていらっしゃいます。私たちが救われる道を歩むことを望んでいらっしゃいます。私たちすべてが神様のようなことを望んでいらっしゃいます。そのためには、愛する独子を犠牲とされました。神様の心は、人々に幸福になって欲しい気持でいっぱいであると証します。

私達の近くにあっては、清水伝道部長をはじめ清水姉妹や伝道部長会、役員の方々が神様と同じくらいに私たちの救いに努力して下さい、いつも助けや励ましをくださいますので感謝しています。

私たちも教会の基を固め、兄弟姉妹がモルモンの会員らしく、愛と勤勉と謙遜と祈りとを、それぞれの思いと行ないの中に持ち続けることができるように、努力してゆきたいと思っています。

私が四国の地に初めて足を踏み入れたのは、九州の福岡支部で4年間の教会員生活を送った後のことであり、今から6年前のことでした。それは私が社会人としてスタートを切ったときでもあり夢多き当時と致しましては、この新しい地はまさに格好の場でもありました。私が初めて高松支部の集会に出席しましたとき、高松で伝道が開始されてから6カ月程にしかならず、会員数も約20名であり勿論四国の中では、高松にしか支部は開かれていませんでした。日曜学校の会長、教師等の責任はすべて宣教師であり、あるときは扶助協会の教師まで宣教師が行なっているときのことでした。

私はこの6年間の四国の歩みを考えてみますときに主の大きな祝福と導きを感じずにはおれません。20名余りの会員数はこの6年間で700名を越える四国地方部へと成長し、高松支部、松山支部、高知支部、徳島支部、丸亀支部にあって信仰厚き活発な兄弟姉妹たちは、福音を宣べ伝えるべく、人々に救いを得させるべく神権活動にまた日曜学校、MIA、扶助協会、プライマリー等の補助組織活動に生き生きと励んでいます。帰還宣教師の米村武敏兄弟を第一副地方部長に、東京ステーキ部のMIAで活躍された神崎武二郎兄弟を第二副地方部長に迎えた私たち四国地方部長会は、今年目標を家庭のきずなの強化と新支部建設に設定致しました。四国にあって今まで、ともすれば福音を学ぶところ、勉強するところ祈るところは教会でした。しかし私たちは家庭で福音について学ぼう、家庭で祈ろう、そして家族のあきらめではなしに理解を得ようと考えています。またこの四国をシオンのステーキ部と為すべく四国の各県にもうひとつの支部を建設し、神の力を孤立した点として迎えるのではなく、線として面として四国一面を神の力で覆いたいと考えています。

最後に主は実に生きたもうことを証し、主イエス・キリストの御名を通して致しました。アーメン。

新しい年に入って、私は、教会に対する感謝の気持で一杯です。またすべての人々の心の望みを満たしてくれるその教えに感謝しています。私にとって主の教えほど美しく、また人の幸福に必要なすばらしいものはありません。主の教えに従えばそれだけ豊かな祝福を受け、幸福になるのです。

「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」(ヨハネ10:10)と救い主は言われました。これは人

に与えられた約束の中で最大のものであり、神のみが与え得るのです。神のみが命を与え得るのです。私は心底からこの約束の成就を信じています。真の人生、豊かな人生はキリストの生涯の中にのみ見いだせるのです。教会は、この豊かな人生を得るためさらに努め励むようすべての人に訴えています。今日その思いは人の心をはるかにしのぎ、おそらくこれまでになく高いものとなっています。現在人々は、衣食住を十分に満たし、家族に慰めをもたらすに足る生涯の道を選ぶと努めています。

生計をたてることは、人生の目的ではなく、単なる手段に過ぎません。生計をたてることは、長い人生の旅で私たちを支えるために使われる機械を調子よく動かし続けることに過ぎません。生計をたてることは欠かせませんが、人生を立てることは義務であり、永遠の祝福です。ある人々は生計をたてて単に存在しているだけです。これらの人々にとっては、人生は退屈で単に生きているということに過ぎないのです。それは生活ではありません。またある人々は楽しむだけの人生を送っています。非常に多くの人々がそのことを人生の目的としています。しかし彼らにとって、人生は満たされないものです。享楽を目的としている人々は、享楽は幸福でないことを晩年に至って知ることでしょう。またある人は名声を得ることを人生の目的としています。これらの人々は、空虚

豊かな人生のために



日本伝道部長
トモスエ・アボ

と幻滅を罰として受けます。富を唯一の目的としている人々もいます。これらの人々にとっては、利己主義と人生の美に対する乏しい見解とが大きな報いとなるのです。そしてしばしば、彼らの希望はどん欲と失望の内に消え去るのです。

人生の真の目的は、神の靈感に導かれて各人が努力し、人間性を完成させることなのです。現実の人生は、私たちの周囲の最善のものに応じることです。

ある偉大な作家は、言っている

。「善と仁慈、貞潔と愛、詩、音楽、花、星、神および永遠の希望にあらず、欲求、享楽、誇り、蓄財にのみ生きるとは全く無益なことである」と。

人は単なる動物ではありません。霊的な存在者です。すべての人はいつか、神との関連を知りたいという押えがたい願望を待つのです。人の霊は神に手を伸べます。岸から岸へ転々とし、ついには人生の流れに無為のうちに埋没してしまうような単なる物ではないことを認めるようになります。人の内には、自らを高め、環境を支配し、肉体と外形的なすべての事柄を治め、より高くより美しい世界に生きるように促す何ものかが存在しています。

人の内には、前進し高めようとする神性があります。教会員は、体内のこの力は神からもたらされるみたまであると信じています。人はこの世に来る前にも存在していました。そして聖なる宮である肉体の内に住まう霊を完成させるために今この世にいるのです。

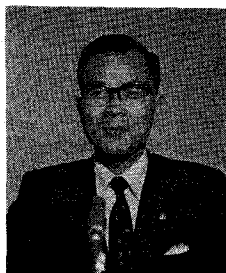
豊かな人生へ通ずる諸原則は、人生のあらゆる面ですべての人に適用できます。この神権時代に授けられた主イエス・キリストの教えにしっかりと立つよう、日本の聖徒たちに願って止みません。「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」(ヨハネ10:10)と言われた救い主の心にかなうよう、霊的な人生をお送り下さい。

「汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。また真理を知

教会のある総大会で、ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように語られました。

「生涯を通じて、私は福音の原則を学び、それについて熟考し、主の律法にそって生きることを追い求めてきた。その結果、主への愛、主の御業への愛、また地上での主の目的をさらに追い求めるあらゆる人への愛が、心のうちに湧きあがってくるようになった。」

現在、セミナーやインスティテュートなど、聖典を系統的に学ぶための機会が多く与えられています。聖典で語られる主の言葉は私たちの中より暗黒を追い出し、全き光へと導いてくれるのです。



聖典から学ぶ喜び

松 本 潔

東京第3ワード部

イエスはたとえ話で多くの事を語り、こう言われました。「見よ種まきが種をまきに出て行った。まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いばらが伸びてふさいでしまった。ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。耳のある者は聞くがよい。」

(マタイ13:3) 西暦31年の秋、ガリラヤ湖岸近くのボートの中から群衆に語られたイエスのこのたとえ話は、まことに生命ある言葉として、2千年の時を越えて、今日そのまま私たちに向けて語られているように感じられます。「耳のある者は聞くがよい」。そうです、聞く耳をもって、神からの真理の言葉を素直に聞く者には、ますます豊かな祝福が与えられ、聞く耳を持たない者には、迷いと不安の暗黒の世界が用意されているようです。

この時満ちたる神権時代に生を受け、主の豊かな祝福と導きによって、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として召されたことを心から感謝しております。主はこのように言われております。「しかし、あなたがたの目は見ており、耳は聞いているから、さいわいである。」(マタイ13:16) そこで、種まきの、たとえ話を聞きなさい。「だれでも御国のことばを聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪い取って行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。石地にまかれたものというのは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。その中に根がないので、しばらくつづくだけであって、みことばのために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。また、いばらの中にまかれたものとは、みことばを聞くと、世の心づかいと富のまどわしとが、みことばをふさぐで、実を結ばなくなる人のことである。また、良い地にまかれたものとは、みことばを聞いて悟る人のことである、そういう人が実を結び、百倍、あるいは六十倍、あるいは三十倍にもなるのである。」(マタイ13:18)

私は1966年10月に、41歳でバプテスマを受けました。妻と4人の

子供たちは、半年ほど遅れてバプテスマを受け、家族全員がモルモンとして新しい人生を歩み始めましたが、福音に対する知識は乏しく、全くの手さぐりの状態の信仰が長らく続いておりました。この教会がまことの神様の教会であるという確信はありましたが、自分たちの生活の中に、イエスの教えが完全に入りこんでくるのには、長い年月が必要でした。日本人として、神道、仏教、儒教などの影響は、風俗、習慣、生活様式の中に深く根ざしており、実生活の中に西欧風のクリスチャンらしさをまとうことはなかなかできず、日本人的な生活の中に天父なる神と、イエス・キリストを受け入れた生活をするように努力してきました。ハワイ神殿訪問、ソルトレーク神殿訪問を通じて、モルモンの家族を見聞し、私たちの家庭の中にも少しずつ、モルモンらしさがそなわってきているようですが、まだまだ本物ではないようです。昨年は教会員になってから7年目ですが、本当に素晴らしい祝福をもらいました。8月に家族全員でハワイ神殿を訪問して子供たちとのシーリングをすませたこと、もうひとつ最も大きな祝福として5月に東京ステーキ部の、インスティテュートの教師として召されたことです。

福音を系統的に学ぶことの大切さを本当に知ることができ、素晴らしい指導者から、福音を体で感じ取ることができましたことは、私にとって、全く新しい信仰の第一歩をふみ出したような感じがしております。今まで何回も読んだ聖書が全く新しい書物のように思えてくるほど、心に響いてきました。6月から3カ月間準備をして第1回のインスティテュートを、10月から開始しました。タルメージ長老のキリスト・イエスからイエスのたとえ話を勉強しましたが本当に素晴らしい感動でした。少ない生徒数でしたが毎週のレッスンに熱心に参加して下さり、未熟な私の話に真剣に取り組んでおられる様子が、こちらの心に響いてくるので、私もレッスンの準備に充分の時間と祈りをもって応えるようになり、今まで理解できなかった聖句が本当によくわかるようになりました。主のみこころの深さがひしひしと感じられ、この3カ月間ほど充実した時はありませんでした。真理は人を変える。主のみたまの導きによって、7年間の手さぐりからようやく光明の世界へ一歩ふみ込んだような、今日の頃です。

道ばたにまかれた種や、石地にまかれた種のように、自分の心を固い道路や、石地にしてしまっているのは、どんなに良い種でも、育つことはできません。また心の準備はできていても、いばらの中にまかれた種のようになるとは、何かと苦しいことが多いものです。しかし私たちはどうしても、このいばらの中に入りやすいので、いつも心を低くして、主により頼まねばなりません。良い地にまかれた種でも、その実を結ぶ程度に差ができると言うことは、真の道は限りなく、大きく、深いものと、ただただ主のみこころを思い、常に神のみことばを学び、心を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして神を愛し、神からの愛を自分の心に感じるができるように準備したいと思っております。

「父と母とを敬え」。また「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」。(マタイ19:19)

隣り人を愛することができるようになるためには、本当に自分自身を大切に愛することができるように、準備する必要があります。神の子としての自分を正面から見すえて、神の子としてふさわしい者となるように自分自身を整えることがまず第一です。神権者とはまさしく、自分を神の代理として行為できる立場におく者であります。心を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして、神のみわざに奉仕し、正しく神権を行使できるよう自分を整え、神からの正義の力

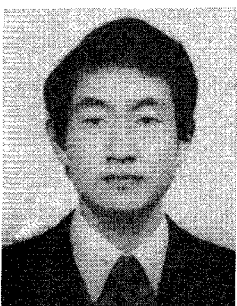
らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし」

(ヨハネ 8:31, 32)

をその身に受け、神のみこころを、自分のこころとすることができるよう訓練され高められる必要があります。このようにして神からの豊かな祝福を受けるとき、みたまによって清められ、神の子としての、多くの隣りに奉仕の業をすることができるようになります。

父母を敬い、妻を愛し、わが子を、神からの預りものとして正しく神のみこころを教え、その子の行くべき道を教えることは、人として最も大きな責任であり、福音の教える、完き幸福はそこにあるのだということがわかってきました。

「狭い門からはいれ、滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そしてそこからは行って行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者は少ない。」(マタイ7:13) 私たちは今、狭い門から入り、細い道を歩んでいるので、窮屈であり心細いかもしれませんが、世の中の大道を高速で突走る危険は、何としても避けたいものです。聖典に親しみ、主の教えを調べ、救いに至る道を見出し、その言葉を聞いて行なう者となり、イエス・キリストの岩の上に堅固な家庭を築くように努力しましょう。私はこの教会が神の予言者を通して、聖徒らを整えて神の王国を地上に建設していることを心から証致します。イエス・キリストの御名によって、アーメン。



インスティテュート に出席して

渋川 高正

東京ワード部

教会に入ってから私を変えてくれたものがいくつかあります。それはあるときは兄弟姉妹であり、あるときは聖典の聖句であり、教会のプログラムであったりしました。そしてその中のひとつとしてインスティテュートをあげることができます。

私が初めてインスティテュートに出席したのは、去年の5月でした。当時、地方から出てきたばかりであった自分にとって教会は単に足を運ぶだけの所でしかなかったように思います。しかしそんなとき、なにげなく出席したインスティテュートは心の内に熱いものをわき立たせてくれたのです。

霊を高めてくれる日が安息日であるのなら、霊に勇気を与えてくれるのはインスティテュートでした。集会が終わって帰るとき、心はずんで何かしないではいられないような気持ちになったことが何回あったことでしょうか。

インスティテュートは本当に私を変えてくれました。私は自分の弱さをいつも強く感じて、そのために素晴らしい兄弟姉妹を見るたびに、自分がその人たちに握手を求めることも苦痛に感じていたのです。でも今は違います。インスティテュートに出席して、福音に對しての知識、また、天父やイエス・キリストのことを学ぶことによって、自分でも、神様が生きているのなら、この弱さを克服することができるのだという自信を持つことができたからです。インスティテュートを通して、私は次のことを確信しました。「神様が共にいるのなら、何物をも恐れることはない。」

出席した兄弟姉妹はみな、インスティテュートの素晴らしい証

し人となってくれるでしょう。そしてすべての兄弟姉妹がこの集会に出席するようにと、心から願っています。幸いにも私たちには、3月ふたたびこの機会が与えられました。本当に多くの兄弟姉妹がこの素晴らしいインスティテュートに出席して、自分の証を自分自身でつかんでほしいと心から望みます。



セミナーで学ぶ

永井 君子

神戸ワード部

モルモン経と新約聖書について、この2年間セミナーで学ぶ機会を与えられたことを心から感謝しています。セミナーに参加されている兄弟姉妹がすべて経験されたように、このクラスで学ぶのは一言に言って本当に楽しいことです。

昔、学生時代にこれほど楽しく宿題をした記憶は全然ないのですが、老眼鏡を手離せなくなった現在、夢中になって若い方たちと共に学ぶことができるとは何とありがたいことでしょうか。

外出や家事のあい間のわずかな時間に机に向かい、聖典と家庭学習のプリントを開くとき、私はたちまちアルマと共に戦い、伝道をしているかのように、また悩み、切に折られる主を暗い園の片隅から見守ってでもいるかのように、あるいは奮いたち、また身の縮む思いをしながら聖典の世界に引き入れられてしまうのです。時間の経つことの早いこと、そして何と頭の回転の遅いことか。時計とにらめっこをしながらユーモラスな質問に苦笑したり、前途遠大な自分の姿をありありと数字に表わされてがっかりしたりするのですが、聖典を精読させ、易しいところから始めて一つ一つ正確に知識を積み重ね、整理し、系統立て、いつか原則をしっかりと学ばせ、信仰を確立させてゆく、セミナーの指導方法は全く素晴らしいものです。印象的な多くの挿絵が教材に用いられていることも、さらに主や予言者たちを身近に感じさせ、時の隔ての厚い壁を除く助けになっています。どのクラスで学ぶときでも当然、予習復習はするはずですが、特に家庭学習ではたくさん問題の答えを記入するためにどうしてもていねいに読み、理解し、記憶し、実践をしなければなりません。これらのことが私たちを強め、変化させる重要な要素であると思います。聖書に接してから40年余、初めてモルモン経を読んだときから約16年経っておりますのに何と自分は何も覚えていないのだろう、不注意に読み飛ばしているのだろう。これがすなわち私の信仰態度なのだと今さらながら背すじの寒くなる思いがして強く反省しております。

私はセミナーで学ぶことによって天父と御子イエス・キリストの愛をより深く知り得たこと、また自分はどのような人間であり、どうしなければならないかをさらに少し理解できたことを心から感謝しています。そして常にクラスの皆を優しく励まし、寝る間もさいて献身的な奉仕と指導をして下さった私たちの素晴らしい教師、清水菊江姉妹に深く感謝しています。

私は天父なる神と御子イエス・キリストが確かに生きてまい、この真の教会の様々なプログラムを通して私たちに救いの道を示して下さいますことを心から証致します。

聖 徒 の 道

1974年3月20日発行（毎月1回20日発行） 第18巻第3号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可

